歴史テクストにおけるフランス語の単純未来形の機能に関する研究
－*La Proclamation de la Commune* をコーパスとして－

小川 紋奈

1. はじめに

フランス語の動詞時制の一つである単純未来形 (futur simple，以後 FS と略記する) は，発話時より後のまだ実現されていない事柄に言及する場合に用いられるものであるとするのが伝統的な考えである．だが，過去の既に起こった事柄を述べる際，様々な形の過去形はもちろんのこと，歴史的現在と呼ばれる語りの現在形，さらには FS も使用されることもある．この最後に挙げたものは，歴史的未来 (futur historique [1]，以後 FH と略記する) と呼ばれるものである．

FS の分析において, 従来の研究では, 時間的用法 (emplois temporels)とモダールな用法 (emplois modaux) の二つの用法の存在を認め，その時間的用法の一つに FH が分類されるのが一般的である．しかしこの二分法的分析は，Benveniste などの言語学者が主張している語りのレベルを設定せず [2]，文単位でのレベルを基準として分析しているという大きな問題点がある．

対話者の存在を前提とする語りのレベルである discours における分析と，発話時に対話者が存在せず主観相を持たないとされる histoire レベルでは，その語のレベルが大きく異なる．FS はこの語りのレベル分けにおいて，discours を示す時制であり，histoire に属する時制ではないと区分されている．しかしながら，歴史テクストにおいて FH としての FS が使用されているのである．FS の使われ方は，従来の分析において FS にモダールな用法を認めていることからして，主観相を持たない histoire レベルにおいてモダールな用法をもつ FS を使用することがなぜ可能なのかという疑問が浮かんでくる．

こうした histoire における未来形に焦点をあてた研究はほとんど見られず，さらに言うと，histoire は物語の叙述と歴史の叙述両方を指し示すが，FH を考えるうえでこの二つは区別して考えなければならないものにもかかわらず，この区別が厳密化していない現状がある．それゆえにこれから本稿で行おうと思う研究は FH の問題に新たな視点を導入する重要なものであると考えられる．

歴史テクストや伝記などは一般的に言って書き手の現在からも読み手の現在から見ても既に起きた過去の出来事が述べられているものであり，単純過去形，複合過去形，半過去形等の過去時制や歴史的現在ですべてを述べることも可能なはずである．だが，歴史的叙述において FH を示す FS が用いられることは稀ではなく，FH は多くの歴史テクストに登場するが，いったいどのような場面でどのような効果を担って使用されるのかという問題は未だに詳しくは研究されていない．

後述するように，FS の様々な用法研究は数多くなされており，その用法の一つに FH があるこ

[1] この名称の他に，futur des historiens と呼ばれることもある．
[2] この問題についての詳しい考察は 4.1.2.を参照．

とは多くの言語学者に認められている．これは過去の歴史的な出来事の叙述において用いられる FS のことを指しているが，FH は，歴史的記述において過去の出来事を現在形で表す歴史的現在 (présent historique) と同様に，歴史テクストで見られる表現方法であり，特殊なテクスト内でのみ用いられるものである．この表現方法は，書き手が書いた叙述した時点ではすでに完全に過去の出来事だが，FH で表される出来事よりも前に起きた出来事に対しては未来であるため用いられるという指摘や，過去の叙述の中で書き手が視点を過去に移すことによって未来の出来事を表すために FS を用いるという指摘[3] などはなされているが, なぜ過去の出来事を述べる歴史的記述において一般に未来を表す表現である FS を用いるのかという問題に関しての研究はなされてはいない.

過去に実際に起きた出来事を語る歴史叙述では，理論的には過去形や歴史的現在だけで記述することも可能であるはずであるのに，なぜわざわざ未来形を用いる場合があるのだろうか．どのような場合に FH は使用されているのだろうか. この歴史的記述テクストと FS との間に著者の意図や何らかの語用論的あるいは文体論的機能，効果が見いだせるのではないだろうか．しかし，いくら従来の用法研究を行ってもこうした問題を究明するための手がかりを掴むことは不可能であるように思われる．こうした研究を行うためには用法研究の成果を基礎としながらも，歴史的テクストというジャンルにおける特定のテクストを，テクスト全体として連続的に考察していかなければならない．用法研究がある程度議論されてきているため，テクストを考慮に入れた視点からの研究が FH の考察に対して新たな視座を開いていくように考えられるのである．そして，その分析結果を通して，FS の新たな特質を見いだせるのではないかと考えられるのである.

以上のことを踏まえて, 本稿では, 次に示すような手順によって研究を進めていきたいと思う. 第 2 章では，コーパスとして使用する Henri Lefebvre の歴史書である *La Proclamation de la Commune* のテクスト的特徴に関して述べる．第 3 章では，FH を研究する上での基盤である FS の先行研究について，FH に関係する諸問題を中心として考察していく．第 4 章では，*La Proclamation de la Commune* のコーパス内に出現する FS の中での FH を分類し，検討を加えていく．第 5 章では，コーパスの考察のみを行った第 4 章の結果を踏まえて理論的な側面からの分析を行う．最後に，全体を綜合化した研究結果を結論部分で提示していく.

2. 分析対象（コーパス）について

ここでは，本稿のテーマである歴史的な記述における FS の働きと効果の研究に取り掛かる前に，分析対象 (コーパス) として使用する Henri Lefebvre によって書かれた *La Proclamation de la Commune* [4]の特徴について述べておこうと思う．なぜなら，ジャンルやスタイルを重要とする本研究ではコーパスがどのような特徴を持っているかという事象の提示は欠かせない要素の一つだからである．この章は，以下の手順に従って論述していく．2.1. 歴史テクスト *La Proclamation de la Commune* の概要：コーパスとして用いる *La Proclamation de la Commune* の背景について見てい

[3] 詳しくは 2.1.を参照のこと.

[4] Henri Lefebvre (1965) : *La Proclamation de la Commune, 26 mars 1871*, Gallimard.

き，2.2. 歴史テクストが持つ問題性：歴史テクストが持つ言語学的問題について大まかに述べ，2.3. コーパス内の単純未来形と歴史的未来に関する統計表の提示：コーパスをグラフ化し，分析の基盤となる各章ごとの FS，FH，さらに迂言的未来形の各章ごとの出現の割合を提示する．

2.1. 歴史テクスト *La Proclamation de la Commune* の概要

La Proclamation de la Commune は前述したようにフランス人のマルクス主義社会学者であり哲学者でもある，Henri Lefebvre (1901-1991) によって書かれた歴史テクストであり，普仏戦争 (La guerre franco-allemande de 1870, 1870-1871) の混乱の中で 1871 年に起きたパリ・コミューン (Commune de Paris) に関して 1965 年に分析・検討したものである．したがって，このテクストがパリ・コミューン発生当時に書かれたものではなく，約 100 年後に歴史的事実を詳細に振り返って書いたものであるという点に留意しておきたい．

パリ・コミューンという事件に関して一言触れておく．1870 年 9 月セダンの戦いでナポレオン 3 世はビスマルク率いるプロシア軍に降伏し，その後パリはプロシア軍に包囲される．1871 年 3 月に首相であるティエールがヴェルサイユに逃亡し，それに伴いプロレタリアを中心とした世界史史上初めての共同体政府が確立される，それをパリ・コミューンと言う．

2.2. 歴史的テクストがもつ問題性

文法的側面に関する問題を考えた場合，一般的に歴史テクストにおいてはいかなる時制によって語るかという問題が必然的に存在している．さらに過去時制をベースとしているのか，それとも現在時制をベースとしているのか，過去時制ならば単純過去形なのか複合過去形なのかによって叙述方法が異なってくる．この問題は用法分析といったラングのレベルでの考察に関わっているだけでなく，パラグラフやテクスト全体に対する作者の考えといった文体論的側面からも分析が可能である．そこにはジャンルやスタイルといった問題も絡んでくる．つまり，選択された時制によって歴史的事実を記述する視点が大きく異なってくる．例えば，当然のことではあるが，過去時制のみでの記述と，歴史的現在や FH を用いた論述では，出来事に対するアプローチに相違がみられる．本稿では従来の複数の文献からの短文抜粋を用いた文法研究ではなく，一つのテクストを用いてジャンルという問題も含めた文体論的問題に関して明らかにし，考察していきたい．なぜならこの観点からの考察はこれまで活発になされていないため，比較的多く研究されてきたラングのレベルでの研究ではわからなかったことが明らかになる可能性を秘めており，さらに複雑なテクスト研究を進めるうえでの一つの新たな方法提示になるのではと考えるからである．

2.3. コーパス内における単純未来形と歴史的未来に関する統計表の提示

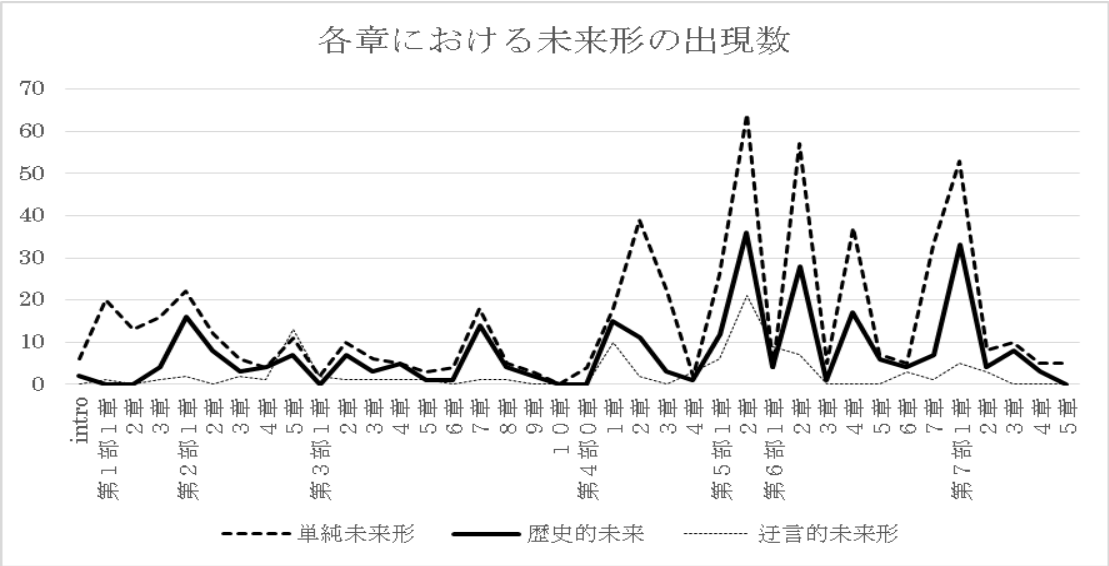
ここで，*La Proclamation de la Commune* を選択した理由について一言触れておくことにする．FH は歴史的記述というジャンルのテクスト内においてみられる FS であり，歴史的事実と FS が結びついていなければならない. 本来ならば複数の歴史的記述のテクストを分析する必要がある．しかし，そのような大がかりな研究を行う前に，一つのテクストに絞って詳細に分析し，特定の

ジャンルにおける単純未来形の一つの方向性を提示することは今後の研究の第一歩として有益であると考える．

様々な歴史的記述のテクストの中でも Lefebvre の *La Proclamation de la Commune* は FS の出現が 559 例，そのうち著者の発言や意見を含まない，純粋に歴史的事実を描写するために用いられている FS である FH の数は 272 例と，まれに見るくらいの多くの FS が用いられている [5]．だからこそしっかりと分析できるのではないかと思われ，またこの数からこのテクストにおいて FS は重要な役割をしていると考える．過去の実際の出来事を描写する歴史的記述テクストにおける未来形のこの数は，決して軽視できるものではないだろう．このように多くの FH が用いられているテクストはあまり見られず，その点で多くの分析例を有する *La Proclamation de la Commune* は我々に何らかの手掛かりを与えてくれる可能性が高いと思われる．

La Proclamation de la Commune 内のすべての FH を分析すべきであるところだが，本稿では範囲を絞って研究していくこととする．なぜなら，7 部構成のこのテクストにおいて第 1 部と第 2 部，第 3 部はパリ・コミューンの背景やそれに対する著者の考察が多く，第 7 部の第 3 章，第 4 章，第 5 章はパリ・コミューンの結果に対する著者の考えが示されており，FS 自体はこれらの範囲にも数多くみられるが，歴史的記述における FS の分析対象としては不適当である．したがって，本稿では著者の考えが少なく，パリ・コミューンという出来事自体を詳細に追っていく第 4 部，第 5 部，第 6 部と第 7 部の第 1 章，第 2 章を研究対象として，FH の使われ方，既に決定された歴史的事実に対して未来形を用いて描写することによる文体的効果について分析していくこととする．

コーパス全体を統計表としてまとめ，各章ごとにおける未来形の使用率を示したものが以下の図や表である．FH は FS の用法の一つであるため，表ではまずすべての FS の数を示し，それからその中に含まれる FH をパーセンテージで示している．



図A

[5] Appendices や Table chronique など本文以外は研究対象から除外するため含まない．

表 A：未来形の出現数

	序章	第 1 部			第 2 部				
章		1	2	3	1	2	3	4	5
ページ	9-11	15-26	27-42	43-68	69-88	89-96	97-101	102-106	107-118
単純未来形	6	20	13	16	22	12	6	4	11
歴史的未来	2	0	0	4	16	8	3	4	7
近接未来形	0	1	0	1	2	0	2	1	13
%	33	0	0	25	73	67	50	100	63

	第 3 部							
章	1	2	3	4	5	6	7	8
ページ	119-121	122-130	131-134	135-140	141-148	149-154	155-160	161-163
単純未来形	2	10	6	5	3	4	18	5
歴史的未来	0	7	3	5	1	1	14	4
近接未来形	2	1	1	1	1	0	1	1
%	0	70	50	100	33	25	78	80

	第 3 部		第 4 部				
章	9	10	0	1	2	3	4
ページ	164-168	169-170	171-172	173-182	183-205	206-210	211-218
単純未来形	3	0	4	18	39	22	2
歴史的未来	2	0	0	15	11	3	1
近接未来形	0	0	0	10	2	0	3
%	67	0	0	83	28	14	50

	第 5 部		第 6 部				
章	1	2	1	2	3	4	5
ページ	219-232	233-288	289-291	292-317	318-324	325-339	340-342
単純未来形	26	64	4	57	5	37	7
歴史的未来	12	36	4	28	1	17	6
近接未来形	6	21	9	7	0	0	0
%	46	56	100	49	20	46	86

	第 6 部		第 7 部					合計
章	6	7	1	2	3	4	5	
ページ	343-351	352-366	367-388	389-398	399-403	404-406	407-410	
単純未来形	5	33	53	8	10	5	5	559
歴史的未来	4	7	33	4	8	3	0	272
近接未来形	3	1	5	3	0	0	0	125
%	80	21	62	50	80	60	0	

3. 先行研究の検討

この章では，FH の用法について，その特徴を踏まえて，歴史的記述において使用される場合の傾向についての仮説を立てるための基礎を組み立てていくために，従来の研究で行われている FS の用法について，先行研究を挙げながら検討していく．それゆえ，ここではあくまで FS の用法研究のみの考察を行うもので，詳しい理論的な分析は第 4 章のコーパスに対する研究の後に，第 5 章で行う．

3.1. FS の用法に関する伝統的な定義

文法書や研究書で FS についての記述を見てみると，

(1) Le futur simple indique la simple postériorité d'un fait par rapport au moment où l'on parle.
(Grevisse 1975, p.730)
(単純未来形は，ある事象が発話時よりも単に後のものであることを示す．)

(2) Le futur simple s'emploie en discours lorsqu'il s'agit de situer un procès comme ultérieur par rapport au moment de la parole. (Barceló et Bres 2006, p.104)
(単純未来形は，ディスクールにおいて発話時より後に事行を位置づける場合に用いられる．)

とあり，発話時より後に事行を位置づける場合に用いられるとしている．

しかしながら，FS を用いた文として，

(3) Il **pleuvra** demain.
(あすは雨だろう．)

(4) Tel qui rit vendredi dimanche **pleurera**.
(諺：金曜に笑う者は日曜には泣くだろう．喜びは長続きしない．)

(5) Tu n'**oublieras** pas de me rendre la monnaie.
((買い物を頼んで札を渡し) お釣を返すのを忘れないでよ．)

などを挙げることができるように，FS は，単に未来に行われる事柄を表す文にのみ使用されるわけではない.

伝統的な文法書の一つである『新フランス文法事典』(朝倉, 2002, pp.227-229) で FS の用法に関する記述を見てみると,

(6) A. 時制的用法
  (a) 現在を基点として未来の行為を表わす
  (b) 過去を基点とした未来
  (c) 自由間接話法で：歴史的現在形に関係するとき
  (d) 従属節の未来形：主節が過去時制の場合
  (e) 一般的真理を表わす
 B. 叙法的用法
  (f) 意志
  (g) 脅迫
  (h) 命令
  (i) 直説法現在に代わる断定的語調の緩和 (futur de politesse)
  (j) 憤慨・抗議：感歎文・疑問文で
  (k) 予想，推測 (futur de probabilité) : avoir, être の単純未来
  (l) 条件・譲歩

と区分されており，非常に多義的に使用されることがわかる.

フランス語の FS の用法研究に関しては，古くから数多くの研究がなされているが，多くの研究ではこのように FS には大きく分けて 2 つの用法に区分できるとしており, 時間的用法 (emplois temporels) とモダールな用法 (emplois modaux) として認めている[6]. 時間的用法とは青木 (1998, pp.115-133) によると，極めて客観的で確実なものである. 事態の実現を前提としており，事象に関して, それがいつかを指定する. 話者が発話時点 (現在時) で, ある参照基準 (客観的なデータ，知識，経験) にアクセスし，共話者に新たな情報を伝達する形式である. 一方モダールな用法とは，主観的で不確定な事態の実現を前提としており，話者の価値判断が問題となると，青木は指摘している.

本稿では用法研究を研究対象とはしないが，FH は FS の用法の一つとして区分されるため，まず FS の各用法を見ておくことにする. だが批判的検討は行わず，青木 (1998) や Touratier (1996) を参考に検討してまとめたものを提示するにとどめる.

[6] emplois temporels を時間的用法や時制的用法，emplois modaux をモダールな用法や叙法的用法などほぼ同語だが用語が異なることがある. 本稿では引用箇所では各著者の呼び方に従うが，筆者としては時間的用法，モダールな用法という用語を用いることとする.

(ｉ) 時間的用法

時間的用法の特徴としては参照基準があるため客観性を帯びやすく，時間的な視点が未来に焦点化されている．予定・予告・天気予報，夢想，歴史的未来，法的未来，格言的未来の 5 つのカテゴリーを含む.

①予定・予告・天気予報：時刻表や気象庁のデータ等を参照．明確な時間指示.

(7) L'iPhone 5 **sortira** le vendredi 21 septembre. (22 août 2012, http://www.presse-citron.net/)
(iPhone5 は 9 月 21 日金曜日に発売されます．)

②夢想：夢の世界は不可侵な別世界であり客観的な参照基準であると捉える.

(8) Suzy racontait à Blaise son rêve, qui était toujours le même :
- Un jour, je me **marierai** avec un prince. Il **sera** grand, il **sera** beau, il **sera** fort.
(スジーはブレーズに自分の夢を語るのでした．いつも同じ夢でした.
ーいつか，あたしは誰か王子様と結婚するの．王子様は背が高くて，ハンサムで，力持ちなの．) (青木 1998, p.121)

③歴史的未来： 過去の叙述の途中で視点を過去に位置づけ，未来の事行を描写

(9) Enfin, il part pour Paris. C'est la rupture définitive avec Mme Warens (...) ; désormais dans leurs rares relations les rôles **seront intervertis**, et Jean-Jacques **enverra** quelques petits secours à l'amie qui a tant fait pour lui. La pauvre femme, toujours en dettes, en procès, en projets **mourra** en 1762.
(ついに彼 (ルソー) はパリに旅立つ．これはヴァラン夫人との決定的な袂別だった．(中略) 以降ほそぼそと続く二人の交際においては役割が逆転し，ジャン＝ジャックは，かつて彼にあれほど尽してくれた女友だちのために，僅かながらも援助の手を差しのべることになる．負債や訴訟や計画の立案に夜も日もない哀れな女性は，やがて 1762 年この世を去ることになろう． (Lanson, cité dans 朝倉，冨永，鈴木 1972, p.46)

④法的未来：法体系が参照基準.

(10) Tout Français **jouira** des droits civils. (Code civil, art.8)
(全てのフランス人は市民権を享有する．)

⑤格言的未来：歴史・文化・社会的な共通知が参照されるもの.

(11) Demain il **fera** jour.
(明日は明日の風が吹く．)

(ⅱ) モダールな用法

モダールな用法の特徴とは，話者の主観が必ず何らかの形で未来の側面において反映されているというものである．予想判断・推量，確信，決断・意志，願望，約束，命令，憤慨，皮肉・反語，語調緩和，予言の 10 個を含むものとする．

①予想判断・推量：未来時における事行を話者が発話時に判断.

(12) Si ça continue, on **appellera** le docteur.

(また今後こんな状態が続くようなら，医者を呼ぶことになるだろう．)

(南舘 1998, p.23)

②確信：事行の実現可能性をまったく疑わない．擬似客観性.

(13) Petit Ours Brun tourne autour de la galette et il répète : - Moi, je **serai** le roi...!

(茶色の小熊ちゃんは，ガレットのまわりをぐるりと回って，繰り返して言うのでした．「僕が王様だよ！」) (青木 1998, p.122)

③決断・意志：事行を実現可能とみなしたうえでの話者の自身への決断・意志.

(14) Ma décision est prise : Je **terminerai** ma thèse cette année.

(決心はつきました．今年じゅうに博士論文を終わらせます．) (ibidem, p.126)

④願望：事行の実現可能性にかかわらない話者の強い望み.

(15) Mais ça, il **faudra** me le pardonner. (Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, 1999, p.25)

(でも，それについては許してもらわないといけない．)

⑤約束：発話者の共話者への決断・意志を共話者と共有保持.

(16) Ne t'inquiète pas ; je ne le **dirai** à personne.

(どうぞご心配なく．そのことは誰にも言いませんから．) (南舘 1998, p.29)

⑥命令：共話者の判断を考慮せず事行の実現を促す，共話者に対する話者の意志.

(17) Puis elle dit d'un ton solennel : — Tu la **liras** demain ; d'ici là, je t'en prie, ne m'adresse pas une seule question!...Non, pas une!

(それから，彼女は改まった口調で言った．— 明日になったら，これ (手紙) を読んで．それまでは，お願い，何もきかないで！・・・いい，何一つよ！)

(Flaubert, cité dans 朝倉，冨永，鈴木 1972 , p.44)

⑦憤慨：発話者が内容に賛同しないのみならず憤りの意を主張.

(18) Quoi! je **souffrirai**, moi, qu'un cagot de critique. Vienne usurper céans un pouvoir tyrannique ?

(Molière, *Le Tartuffe*, I, 1, 1664 , cité dans Imbs 1960, p.52)

(なんですって！あの偽善者のおせっかいやきが，この家へはいってきて自分勝手に権力をふるうのを，この私に我慢しろと？)

⑧皮肉・反語：望みが叶わないと知っているうえで共話者や第三者を遠回しに非難.

(19) L'air frais de la nuit me **fera** du bien . (Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, 1999, p.40)

(夜の涼しい風がわたしに元気をもたらすわ．)

⑨語調緩和：共話者に対する発言時に虚構的なずれをもたらすことによる.

(20) —Et même je vous **demanderai** un autre verre de vin.

(そうね，もう 1 杯ワインをお願いしちゃおうかしら．)

(Marguerite Duras, cité dans 朝倉，冨永，鈴木, 1972, p.45)

⑩予言：擬似客観性に基づき伝達者として未来の事行を述べたもの.

(21) Travail : Vous **trouverez** plaisir à faire des efforts qui vous **débarrasseront** de petits soucis quotidiens au travail, aujourd'hui. (www.mon-horoscope-du-jour.com/)

(仕事：今日は，仕事面では，努力をすれば，日頃のささいな心配事を解消することができるでしょう．)

以上で見たように，用法研究では過去の叙述の中で未来の事行を描写する際に用いる FS を FH だと定義し，用法というカテゴリー内の一つとして区分している．しかしながら， FS と同じ性質を保持しながら過去の叙述で使用されているものを FH と呼ぶ，とすることには疑問が残る．Martin (1983)も以下のように述べている.

(22) (...) Le présent historiqe, substitut du passé simple, ne fonctionnne pas strictement comme un présent ordinaire : *Il attend dix minutes, puis* ... illustre un empoloi dont le present effectif n'est pas capable en dehors de l'effet itératif. Il est ainsi vraisemblable que le « futur des historiens » n'a pas non plus les propriétés exactes du futur.

(Imbs, 1961, p.46, cité dans Martin, 1983, p,131)

((…) 歴史的現在は，単純過去に置き換えられるが，通常の現在形としては厳密には機能しない．:「彼は 10 分待っていた，それから…」は，反復効果以外には有効性がない現在形の用法を例示している．それに伴い「歴史的未来」もまた未来形の的確な特性を有していないのは確かである．)

未来形の正確な特性を保持していないのならば，もはや FH を FS の用法の一つに区分することにも違和感が生じる．次節では歴史的未来に絞ってさまざまな先行研究を見ていく.

3.2. 歴史的未来

FS は, 発話時より後のまだ実現されていない事柄に言及する場合に用いられるものであるとするのが伝統的な考え方であるが，過去の既に起こった事柄を述べる際，単純過去，複合過去，半過去といった過去時制，歴史的現在と呼ばれる語りの現在のほかに，迂言的未来形，FS も使用されることがある．前述したようにその場合の FS は，FH と呼ばれるものである．

朝倉季雄 (2002) では FH に関して，3.1.で見られるように，FS の時間的用法の中の一つに過去を基点とした未来の用法があるとしている．「過去未来は一般に futur dans le passé で表されるが，過去の叙述の途中で筆者が観点を過去に移し, 未来の出来事を FS で表すことがある」(朝倉, 2002, p,227),「単純未来は語り手が事実として確認していることを述べるもので，単に予想された事実を述べる条件法現在とは異なる」(ibid,, pp.227-228) と述べている．

しかしながら，これではどのようなジャンルにおける過去の叙述において FH が用いられるのか，どのような場合に未来の出来事を FS で表すことがあるのかなどの問題が全く示されていないという問題がある．

フランス語辞書として有名な *Grand Larousse* では，FH は以下のように記述されている．

(23) Il arrive que le futur prenne appui non sur le point présent, mais sur un point passé : c'est le futur historique ; en ce cas, il s'agit d'une action passé. Cet emploi est conforme aux lois de la concordance dans un contexte au «présent de narration» (exprimant un fait passé en transportant le lecture au moment où il s'est produit) : [...]
(未来は現在の時点ではなく，過去の時点に立脚することもある．これが歴史的未来である．この場合には，過去の行為が問題となる．この用法は,「語りの現在」のコンテクトにおける一致法則に合わせられる (過去の事実をそれが起こった時点に読み手を移動させながら表す).)

そして，次のような例を提示している．

(24) Il s'en fait même, par l'imagination et la littérature, une idée tellement embellie que la réalité le **décevra** (J. Bainville, *Napoléon*). (*Grand Larousse de la langue française*, p.2117)
(想像と文学性によって，現実は彼を失望させるものであるという，かくも美化された考えを彼は作りなした．)

ここでもなぜ過去記述のテクストにおいて FS が用いられるのかについては示されていないが，語りのジャンルにおいて, 過去に立脚し過去の行動を表すときに FH が用いられると述べており，過去の叙述時に視点を移動させた際に用いる点で朝倉の主張と共通している．3.1.で見た FS の定義は，FS は発話時より後に事行を位置づける場合に用いられるであったが，FH に関しては，過去叙述において，立脚点としての過去の出来事より後に事行を位置づける場合に用いられると述

べ得る.

以下では各先行研究で示されている FH の定義を見ていくことにしよう.

3.2.1. Wartburg et Zumthor (1958)

(25) La langue littéraire emploie parfois dans le récit un futur indiquant qu'une action a été postérieure à une autre dans le passé. (Wartburg et Zumthor, 1958, p.210)
(書き言葉では，語りにおいて時として未来形を用いる．それはその行為が過去の別の行為より後のものであることを示すためである．)

Wartburg et Zumthor は，次のような例を提示している.

(26) Le mariage eut lieu 1844. Eugénie **attendra** encore neuf ans. (ibid., p.210)
（結婚式は 1844 年に行われた．ウジェニーは，なお 9 年待つこととなる.）

ここでも，過去の叙述においてある出来事がその前の出来事よりも後であることを示す場合に FH が用いられるとしている．しかし「時として」 (parfois) とは，どのような場合のことを指すのかについては触れられていない.

3.2.2. Wagner et Pinchon (1962)

(27) Par ce tour, le narrateur crée un décalage expressif dans un récit dont les verbes sont à un temps du passé ou au present historique. Fort de ses connaissances il évoque au moyen du futur des faits qui sont passés par rapport à lui, mais qui étaient à venir par rapport au moment où se situe l'histoire racontée : (Wagner et Pinchon, 1962, p.349)
(ここでは，語り手は，動詞が過去時制か歴史的現在である語りにおいて，表現的なずれを作り出す．自身の知識に支えられ，語り手は，自分にとっては過去であるが，物語られた歴史が位置づけられる時点と関連し未来であった事行に対して，未来形を用いて言及する．)

これに対して，Wagner et Pinchon は次の例を提示している.

(28) Jadis Orgon disait, instruit par Tartufe :
Et je verrais périr parents, enfants et femme
Que je m'en soucierais autant que de cela.
La vertu moderne et la piété anglaise pensent autrement ; il ne faut pas mépriser ce monde en vue de l' autre ; il faut l'améliorer en vue de l' autre. Tartufe **parlera** de sa haire et de sa discipline ; Pecksniff de son confortable petit parloir, du charme de l'intimité, des beauté de la nature. Il

essayera de mettre la concorde entre les hommes. Il **aura** l'air d'un membre de la société de la paix. (H. TAINE) (ibid., p.349)

(かつて，オルゴンは，タルチュフに教えられて言っていた．
「わたしは両親，こどもたち，妻が死ぬのを見ることとなるだろう
それ以上にわたしは何を心配するだろうか」
現代の美徳と，イギリスの信心はちがった考え方をする．他の世界を見据えて，この世界を軽んじてはならない．他の世界を見据えて，この世界をよくしなければならない．タルチュフは彼の毛衣（修行のときに身につけるもの）と修行を語ることになる．ペクスニフは，快適で小さな面会室，自然の魅力と，親密さ美しさを語ることになる．彼は人々の間の調和をもたらそうとすることになる．彼は平和の社会の一員のようになる．)

ここでは，語り手の知識に基づいて，語り手にとって過去だが語られる歴史が位置する時点に対しては未来である事実を，未来形を用いて言及するとしている．ここで重要なのは知識に基づくという点であるが，ここから歴史的叙述における FS は，著者の現在時の知識に基づいて回顧的な見方 (rétrospectif) をするのではなく，前望的な見方 (prospectif) で叙述していることを示していると思われる．

3.2.3. Barceló et Bres (2006)

(29) ces événements actualisés au futur sont antérieurs au moment de la parole, et donc appartiennent à l'époque passée. (Barcelò et Bres, 2006, p.110)

(未来に現働化されるこれらの出来事は，発話時より前であり，つまり過去の時に属している．)

(30) le locuteur transporte fictivement le moment du passé dans le *nunc*, d'où il peut considérer l'événement comme futur. (ibid., p.111)

(語り手は現在に過去のときを虚構的に導いており，その現在では出来事を未来とみなすことができるのである．)

Barceló et Bres は次のような例を提示している．(31) は歴史的現在がベースに，(32) は単純過去形がベースとなっている．

(31) Les rumeurs fraient avec les manipulations. Celles-ci conduisent, dès juin 1990, sur la piste des « bacchanales » : on apprend que le cimetière sert régulièrement de rencontre nocturne à des jeunes gens de bonne famille. Quarante jeunes sont interpellé. Tous **seront** finalement **relâchés**. *(Le Monde*, août 1996) (ibid., p.110)

(噂は操作と親和性がある．操作は，1990 年 6 月から，ひとを「馬鹿騒ぎ」の場へと導いた．墓地は，両家の子女たちにとって，夜の出会いの場としていつも役立っていると

知られている．40 人の若者が捕まった．全員が結局は解放されることとなる．)

(32) Bob Tahri, parti comme un avion, ne put d'ailleurs soutenir le rythme de l'Éthiopien. « *Il est vraiment trop fort. C'était du sprint* », **dira** le Français. Même les Kényans ont dû très vite poser le coude à la fenêtre. (*L'Equipe*, 21 mars 2004) (ibid., p.110)
(ボブ・タハリは，飛行機のようにスタートし，エチオピア人のペースとは比べようがなかった.「彼は本当に強すぎる．短距離レースのようだった」とフランス人は言うことになる．ケニア人たちでさえ，すぐに窓に肘をつくほどだった．)

この論によると，語り手は，虚構的な現在の時間性を構成し，FH はその過去に付随する事象を示すものとして提示されることとなる．虚構的に過去の出来事が起きた時点を現在とみなすことにより FH の使用への道を開いている．

3.2.4. Grevisse (1975)

(33) Parfois, surtout dans les exposés historiques, la pensée du narrateur se transporte à tel moment du passé en fait fictivement le moment présent ; par rapport à ce présent fictif, tel ou tel événement du passé réel s'exprime alors par le futur simple (futur historique) : (...). (Grevisse, 1975, p.731)
(時には，特に歴史的論述において，語り手の考えが，実際は虚構的現在時である過去のある時点に運ばれていく；その場合この虚構の現在に対して実際の過去のしかじかの出来事が単純未来形 (歴史的未来) によって表される．)

Grevisse は次の例を提示している．

(34) L'ancien maître de chapelle retourna souvent aux assemblées de Mme Récamier. Il y **verra** un soir le general Moreau... (É. HERRIOT, *Mme Récamier et ses amis*, p.71) (ibid., p.731)
(礼拝堂の元館長は，レカミエ夫人が開く会合によく訪れた．ある夜，彼はそこで，モロー将軍に会うことになる．)

歴史的な出来事に関する記述では，語り手の思考は過去のある時点に移行する．そのある時点は虚構の現在時と見なされるのだが，FH はそこで実際に起こった過去の出来事を表すのに用いられている，と Grevisse は述べている．つまり，過去のある時点は虚構であるが現在時と捉えられ，その現在時が語りの基準となるので，過去の記述でも FS を用いることができるということである．

3.2.5. Imbs (1960)

(35) Ce futur marque un fait entièrement passé au moment où l'historien écrit ; mais il est futur par rapport au fait précédemment évoqué. Il représente un bond par dessus les événements, il opère

une rupture dans le déroulement du récit, et cela est en effet conforme à son aptitude à évoquer une période autonome et indépendante du contexte. (Imbs, 1960, p.46)
(この未来形は，歴史家が執筆した時にはすっかり過去の事行を示す；しかし先に言及された事行に対しては未来である．この未来形は，出来事の上での跳躍を表し，語りの展開において断絶をもたらす．そしてコンテクストから自立していて独立している時点を連想させる態度に事実上は一致する．)

Imbs は次の例を提示している．

(36) Alors, même pour presider le Conseil d'Etat, [Napoléon] revêt l'uniforme, qu'il affectait naguère de ne pas porter quand il ne fallait pas qu'on criât à la dictature du sabre. Mais cet uniforme **sera** toujours sobre, sévère, avec quelque chose de dédaigneux et de menaçant pour les hommes à panaches et à dorures. (Bainville) (ibid., p.46)
(国務院の議長を務めるときも，ナポレオンは制服を帯びている．かつては，軍事独裁を糾弾されてはならないときには，制服を着ないふりをしていた．しかしその制服はいつも地味で，峻厳で，派手なひとたちにとっては脅迫的な何かがあることとなる．)

FH は，歴史家が書いたときにすでに完全に過去である事行だが，その FH が用いられている事行よりも前の事行に対しては未来であるので用いられるとしている. FS はコンテクストから自立している時点を想起させるという性質があり，したがって語りの流れにおいて FS が使用されると断絶をもたらすとしている．

3.2.6. まとめ

これまでの先行研究では，歴史的叙述において，ある事行よりも後の事行であることを示すときに FH が用いられるという点では意見が一致しているようである． このように，歴史的叙述において FS が使用可能となる範囲については触れているが，時間軸に沿って時が進んでいく歴史的叙述において，どのような記述方法 (スタイル) をする場合に用いられ，どのような効果があるのかについてはどの先行研究にも詳しく述べられていない．

4. *La Proclamation de la Commune* における単純未来形の考察

本章ではまず, コーパスとして用いる *La Proclamation de la Commune* より抜粋した FS を用いているすべての叙述を「歴史的未来を示していない単純未来形」と「歴史的未来を示す単純未来形」の 2 つに分類していく．しかしながら，言表連鎖ごとに抜粋しなければ FH として観察することができないうえに，コーパス全体で FS が 559 例という相当数であるため，本稿においてテクスト内の全ての FS を分析することは難しい．したがって, 典型的ないくつかの言表連鎖に対して, 以下の手順によってコーパスを検討する．4.1.では「歴史的未来を示していない単純未来形」の特

徴を挙げ，つづいて 4.2.で「歴史的未来を示す単純未来形」を提示し，観察する．

4.1. 歴史的未来を示さない単純未来形

まず注目すべきことは, 歴史テクスト内であってもそこに出現する FS のすべてが FH を示すものであるわけではないという点である．歴史テクストにおいてもテクスト構成上の様々な手続きがあり，歴史的出来事を記述するだけではないからである．このコーパスの言表連鎖を観察すると，FH 以外の FS の使用には，以下に挙げるⅠ，Ⅱ，Ⅲの 3 つの特徴があると考えられる．

Ⅰ

(37) Nous **passerons** rapidement sur la « journée » du 22 janvier, au cours de laquelle quelques centaines de gardes nationaux tentèrent de prendre d'assaut l'hôtel de ville et où leur chef, le brave Sapia, trouva la mort. (第 4 部 4 章, p.215)

(われわれは，1 月 22 日の「事件」をすばやく**すませよう**．この日，数百人の国民衛兵が市庁舎を強襲しようと試みた．彼らの指導者，勇敢なサピアはそこで死んだ．)

(和訳書『下』, p.380)[7]

(38) Sur la brève histoire et la fin dramatique de la Commune de Paris, nous **nous contenterons** d'une brève et assez sèche chronologie. (第 7 部 1 章, p.367)

(パリ・コミューンの短い歴史と劇的な結末に関して，われわれはここに簡潔で，かなり無味乾燥な年代記を記すだけで**満足しよう**．) (和訳書『下』, p.290)

Ⅱ

(39) Nous en **dirons** autant des événements d'Algérie, qui donnèrent beaucoup de souci à M. Thiers.

(第 6 部 6 章, p.351)

(このことは同じようにティエール氏を大いに悩ませたアルジェリアの運動に関しても**いえるだろう**．) (和訳書『下』, p.263)

(40) Volontiers nous le **dirons** transhistorique, ou encore poétique, philosophique et « ontologique » (dans un sens rénové de ces termes). (第 7 部 2 章, p.390)

(われわれはそれを好んで超歴史的，あるいは詩的，哲学的，«存在論的» (これらの用語の新しい意味において) とも**呼ぶであろう**．) (和訳書『下』, p.334)

Ⅲ

(41) Vinoy, consulté par les civils, fait répondre, de l'École militaire où il se trouve, qu'en soldat discipliné il exécute les ordres. " Dans une heure les troupes **seront** en route pour Versailles. »

(第 5 部 2 章, p.268)

(文官に意見を求められたヴィノワは, 彼のいる士官学校からこう答えさせる. すなわち,

[7] ルフェーヴル, H (著)・河野健二ほか(訳) (2011)：『パリ・コミューン』(上)・(下), 岩波書店

規則正しい軍人として遂行する，と.「1 時間のうちに部隊はヴェルサイユへの途**につくであろう**.」) (和訳書『下』, p.106)

(42) *«Citoyens,*

*(...)La France, coupable de vingt années de faiblesse, a besoin de se régénérer des tyrannies et des mollesses passées par une liberté calme et par un travail assidu. Votre liberté, les élus d'aujourd'hui la **garantiront** avec énergie, la **consacreront** à tout jamais.(...).*

Les membres du Comité central. »

(第 6 部 7 章, p.362)

(市民諸君

(…)20 年にわたる無気力の罪を犯したフランスは, 今や平静な自由と熱心な労働によって, 過去の圧制と怠惰から生まれ変わることが必要である．諸君の自由については，今日の選出議員が力強くこれを**保証し**，永久に**確立するであろう**．(…)

中央委員会委員)

(和訳書『下』, p.263)

Ⅰにおいて見られる FS は歴史テクスト以外にもたびたび確認され，論文などにおいてこの後述べる事柄について相手(読み手)に前もって知らせる場合に使用されている．3.1.で挙げられた用法分けの時間的用法のひとつである「予告」に値する．Ⅱは叙述されている過去の出来事に対する著者の意見や考えを述べる際に用いられている FS であり，3.1.のモダールな用法のいずれかに相当するものと思われる．Ⅲは手紙や宣言など引用箇所内に出現する FS である．

このようにⅠとⅡのような FS は論文を構成する際に使用される典型例のひとつであり，著者の主観を排除した歴史叙述のなかでは見られず，FH とは言い難い．Ⅲも引用元ではもちろん話者の主観とともに用いられているため同様である．このような FS も上記のように歴史テクスト内で見られるものではあるが，FH の機能を探る本稿の分析とは趣旨が異なるため，本稿では分析対象から除外することとする．

4.2. 歴史的未来を示す単純未来形

ここでは，本稿の研究対象である FH を表す FS を観察していく．次の 3 つの特徴から検討していくこととする：①歴史的現在との共起 (4.2.1.)，②過去形・現在形・未来形の共起 (4.2.2.)，③迂言的未来形との共起 (4.2.3.). その理由としては，まず①が歴史テクストの言表連鎖の中で最も多く出現するパターンだからである．②はある出来事を歴史的現在のみを使って継起的に述べることも可能であるはずだが，なぜ未来形と過去形が出現するのかを探っていく必要性があるからである．③は未来形に FS と迂言的未来形があることは周知の事実であるが，歴史テクストでは両者がどのように使い分けられているのかを見ていくためである．

4.2.1. 歴史的現在と歴史的未来

歴史テクストでは，歴史的現在をベースとして記述しているテクストが少なくはないが，継起的に歴史的現在で出来事を叙述しているなかに，唐突に FH が出現することがある．以下では，そうした展開を持つ記述において歴史的現在と FH のそれぞれがテクスト構成上どのような働きをしているのかを見ていく．

(43) Le bataillon se débande, et la tentative se transforme en manifestation à travers le quartier Latin. Tirée à bras, *l'Alsace-Lorraine* est ramenée place des Vosges par 2000 gardes nationaux. À la suite de cette manifestation, et liaison avec Duval, prennent des dispositions, purement défensives : en cas d'attaque, un coup de canon tiré à blanc **alertera** la population. Vinoy, de son côté, adopte un dispositive d'offensive : deux regiments de ligne, avec de l'artillerie, occupent les jardins du Luxembourg et y cantonnent. (5 部 1 章, p.221)

(大砲は列をみだし，この企てはラテン区を横切るデモに変化する．人手に曳かれた「アルザス＝ロレーヌ」は，2000 人の国民衛兵によってヴォージュ広場につれもどされる．このデモの結果，またみなの不安を前にして，第５区と第１３区の委員会はデュヴァルと連絡をとり純然たる防衛措置をとる．つまり，攻撃を受けた場合には，１発の空砲が住民に急を告げるようにするというのである．ヴィノワの側はどうかというと，攻撃配置をとる．すなわち，大砲を備えた戦列歩兵２連隊がリュクサンブール公園を占領し，そこに宿営する．) (和訳書『下』, p.15)

ここでは現在形をベースとした叙述となっているが，この現在は筆者が執筆している時点での現在ではない．過去のある時点を現在と定位しているこの現在形は，歴史的現在と呼ばれるものである．この歴史的現在が継起的に用いられ述べられていることによって，その出来事ごとが時間軸上に点で結びつけられているように感じられる．このように歴史的現在で時間軸に沿って継起的に出来事を叙述できるにもかかわらず，FS (FH) が用いられている箇所もある．(43) で FH が用いられている箇所では，継起的に述べられている時間軸から離脱し，攻撃を受けた場合にはという可能世界の中でこれから起きる可能性のある事柄を FH を用いて叙述している．この可能世界に基づく時間は，出来事の流れとして進行している時間軸とは別なのである．この可能世界での時間軸は元の時間軸と平行となっており，これからとは歴史的現在で述べられている「防衛措置を取る」という事柄の後のことである．そして FH を用いることによって，「攻撃を受けた場合」におけるいくつかの選択肢候補があることが暗黙に明示され，そのうちのひとつ「一発の空砲が住民に急を告げることになる」が「示されている現在よりも後に起こる」ことを示している．つまり，この FH は「いくつかの選択肢候補があることを暗黙に明示」する機能を有し，その選択肢候補が「これから後に起こる」と見なしている場合に用いられていると考えることができる．

(44) *22 avril*. - La cour martiale prononce (malgré Rossel) l'acquittement d'un colonel trouvé en état

d'ivresse condamne à des peines relativement légères des gardes accusés d'indiscipline et decide la dissolution d'un bataillon, le 105e. La Commune **cassera** l'arrêt. (第 7 部 1 章, p.377)
(4 月 22 日— 軍法会議は(ロセルの意に反し)酔態をとがめられた一大佐の無罪放免を宣し，規律違反で告発された衛兵たちに比較的軽い判決を下し，さらに第 105 大隊の解散を決定する．コミューンはやがてこの判決**を破毀するであろう**．) (和訳書『下』, p.309)

ここでも同様に現在形をベースとして継起的に出来事が叙述されている. FS が用いられている箇所ではこの継起的な叙述から離脱し，跳躍している．FH を用いることによって，歴史的現在で定位された時点からこの先のいくつかの選択肢候補のうちどの方向へ進んでいくかが示されていると考えられる．(44) では軽い判決を下した時点からいくつか存在する潜在的選択肢のなかで破毀する方向へ進む流れがわかる．つまり，FH を用いることで，閉じられた状態で淡々と点で述べられている事実に，開かれた未来の展望をもたらす機能があると考えられる．歴史的現在では出来事ごとに焦点が当てられているが FH を使用するとより大きな展開図が見えてくるとも言えるかもしれない.

4.2.2. 過去形と現在形と未来形の共起

過去の出来事を叙述する歴史テクストにおいて歴史的現在形がベースとして用いられたとしても，過去形が全く用いられないということはない．なぜなら，歴史的現在を用いて過去のある時を現在と定位することによって，それに対する過去や未来という概念を導入することができるため[8], その定位された現在よりも前に発生した事柄に関して過去形を用いて述べることも可能となるからである．未来形も同様の理由で登場する．以下でこうした例の分析を行う.

(45) En haut de la rue Lepic, le Comité central et le comité local de la rue des Rosiers avaient installé une pièce d'alarme. Toujours prête, la ficelle ne quittait pas l'étoupille et la sentinelle devait tirer le coup à blanc dès la première alerte. Le coup d'alarme ne fut pas tiré, on ne sait pourquoi. Se glissant dans l'ombre, les sergents de ville s'approchent alors de la tom Solférino qui domine la Butte. Tout à coup une ombre se dresse devant eux; c'est le garde national Turpin, désigné par le comité de la rue des Rosiers pour monter la faction. Il crie : « Qui vive? », et croise la baïonnette. Aussitôt les gendarmes l'abattent; il tombe, mortellement blessé, et **mourra** quelques jours plus tard. Les assaillants débouchent alors sur le plateau et désarment sans difficulté le faible poste de garde : 6 hommes du 61e bataillon. (5 部 2 章, p.241)
(ロジエ街の中央委員会と地区委員会は，一門の警砲ルピック街の高みにすえつけた．いつでも発射できるように紐が大砲の門管につけられていたし，歩哨は最初の急報があり次第すぐ空砲をはなつはずであった．だが警砲はなぜかわからないが発射されなかった.

[8] 5.1.1 で詳しく述べる.

暗闇にまぎれて市警官たちはビュットを見下すソルフェリノ塔に近寄る．突然人影が彼らの前に立ちふさがる．それは，ロジエ街の委員会から見張りに立つようにと命ぜられた国民衛兵のテュルパンである．「誰か」と彼は叫び，銃剣をつき出す．すぐさま憲兵たちは彼を打ち倒す．彼は瀕死の重傷を負って倒れ，数日後<u>には死ぬ</u>．襲撃者たちはそこで丘の上に出て，手うすな哨所である第６１大隊の６人を難なく武装解除する．)

(和訳書『下』, p.54)

(46) *Lyon.* — Le 22 mars, après trois jours tumultueux, une commission communale (qui <u>comprend</u> 5 conseillers municipaux) <u>est acclamée</u>. Le 23, les conseillers municipaux conciliateurs la <u>quittent</u>. Les autres membres <u>essaient</u> de se maintenir, <u>présentent</u> un programme très vague, purement local, sans allµsion ni aux grandes questions politiques ni aux questions sociales. La Commune **<u>maintiendra</u>** pour Lyon « le droit d'établir et de prélever ses impôts, de faire sa police, de disposer de sa garde nationale ». Très vite, malgré l'arrivée des délégués parisiens qu'une foule nombreuse <u>vient</u> applaudir, la Commission <u>se trouva</u> isolée et des éléments républicains de la petite bourgeoisie, et du peuple. Dans la nuit du 24 au 25 mars, la Commune lyonnaise <u>disparaît</u>; elle <u>s'évanouit</u> littéralement, n'ayant trouvé ni cadres, ni chefs, ni appui sérieux auprès des masses populaires et ouvrières. (6 部 6 章, p.349)

(リヨン—３月２２日，混乱の３日間がすぎ，コミューン委員会（５人の市議会議員を含む）が選ばれた．２３日，和解派の市議会議員が委員会を去る．他の委員たちは委員会を保持しようと試み，政治的大問題にも社会的問題にも触れない，きわめて漫然とした純粋に地方的なプログラムを提出する．コミューンはリヨンのために「市の税金を決定，徴収し，市の治安を維持し，市の国民衛兵を自由に動かす権利」<u>を保持するであろう</u>．パリの代表者たちが到着し，大勢の群集が歓迎に出たにもかかわらず，委員会はたちまち小ブルジョアジーの共和主義分子からも人民からも孤立した．３月２４日から２５日にかけての夜のうちに，リヨンのコミューンは姿を消す．幹部も指導者も人民・労働者大衆の心からの支持も見いださなかったリヨンのコミューンは，文字通り消え去るのである．)

(和訳書『下』, p.260)

以上の例では，大過去や半過去，単純過去等の過去形と現在形と FH が共起していることが確認できる[9]．このように既に完了した過去における叙述においても出来事の時間の流れを表したい時にこれらの時制を用いることができることが観察される．歴史的現在が継起する叙述でも内容理解によって時間の流れを読み取ることは可能であるが，この時間の流れを過去形・現在形・未来形を用いて表すことで出来事に物語的展開が導入される．ここで重要だと思われることは，歴史的現在によってある時点を現在として定位していることによって，それより前の出来事を示すために過去形を，それより後の出来事だと示すために未来形をそれぞれ用いることができる点で

[9] 歴史叙述における過去形の使い分けに関しては，本稿の趣旨とは異なるため取り上げない．

ある．つまり，FH は歴史的現在に常に依存しており単独で出現することは不可能な点である．一方歴史叙述は現在のわれわれから見て過去の出来事であるため本来過去形ベースで描かれる方が妥当であり，過去形が単独で出現することは当然である．また，どの地点に現在を定位して出来事を描写するかは書き手の判断であり，FH は一連の物語的叙述の盛り上がりをどこに持っていくかということが関係しているように思われる．例えば (46) では，「叫ぶ」「剣をつき出す」「打ち倒す」「倒れる」というデュルパンに関する出来事の流れを歴史的現在形で表し，「数日後に死ぬ」という一連の流れの最終地点を FH を用いて描写することによって物語的統一とも言える効果を示しているように考えられる．

歴史的現在との共起の重要性を強調したが，FH はさらに，過去のある出来事が歴史的な事象であったという共通知がなければ FH であるという判断ができないという大きな特徴があると述べ得るだろう．したがって FH を FS の一用法と位置付けることに疑問が生じるが，この問題に関しては次章で詳しく述べることとする．

4.2.3. 迂言的未来形と歴史的未来

歴史テクストにおける未来形は FH (FS) が用いられることが多いが，時には迂言的未来形も用いられることがあることを指摘しなければならない，どのような場合にそれぞれが用いられているのか，2 つの差異を観察して行く．以下の例を見てみよう．

(47) Paris s'éveille libre, la première cité libre depuis qu'il y a des cités. Il **va tenter** une vie nouvelle : la vie nouvelle, dans laquelle les hommes **prendront** en main leur destin. Sur une base sociale définie, ni trop grande, ni trop petite - le quartier -, les gens **vont participer** aux affaires publiques ; leurs affaires. Ils **vont créer**, sur cette base, l'autogestion, le travail libre dans la joie ; ils **vont organiser** la décentralisation. (6 部 1 章, p.289)
(パリは自由なものとして目覚める．都市というものが存在して以来の最初の自由な都市である．パリは新しい生活を試みようとする．その新たな生活のなかで，人々は自らの運命を自己の手に握るであろう．大きすぎもせず，小さすぎもしない限られた社会的基盤—地区—の上で，人々は公共の仕事，自分たちの仕事に参加しようとする．彼らはこの基板の上で，自主管理，喜びのなかでの自由な労働を創造しようとする．彼らは地方分権を組織しようとする．) (和訳書『下』, p.146)

(48) Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement, véritable conseil de guerre, qui **ne se séparera que** vers 2 heures du matin, au moment où **vont commencer** les opérations, arrête le dispositif militaire. M. Thiers est arrivé depuis deux jours à Paris. A Paris, il n'a trouvé que 12 000 hommes armés (la division Faron) plus 3 000 gendarmes. Il a immédiatement obtenu de Bismarck l'autorisation de porter l'armée à 40 000 hommes. Il doit se présenter le 20 mars devant l'Assemblée nationale. Cette échéance approche. Thiers est pressé d'agir. (5 部 2 章, p.236)
(この間に (零時) ，実際上の作戦会議である政府の一会議が軍隊の配置を決定する．こ

の会議は作戦がいよいよ開始される瞬間，午前 2 時ごろにやっと解散されるだろう．ティエール氏は二日前からパリに来ていた．パリで彼が見つけたのは，武装した 1 万 2000 人の兵士 (ファロン師団) と 3000 人の憲兵だけであった. 彼はただちにビスマルクから，軍隊を 4 万人に引き上げる許可を獲得した．彼は 3 月 20 日に，国民議会の前に姿を現わさなければならない．この期限は近づいている．ティエールは行動を急ぐ．)

(和訳書『下』, p.46)

FS と迂言的未来形の差異に関してはこれまでに多くの研究がなされているが，一般に FS は主観相が強くモダール的で，迂言的未来形は主観相が弱く時間的という側面が大きいと言われている．歴史テクストにおいても同様に，迂言的未来形に関しては時間的連続性を強調したい時に用いられていると考えられる．歴史的現在で叙述されると各事象は一つの時間軸において点で定位されていくことが可能になるが，もしも現在形のみで出来事が提示されたならば，各事象間の時間的に緊密なつながりはあまり感じられないであろう．

(47) を見てみよう．迂言的未来形も FH を示す FS も共に「パリは自由なものとして目覚める」という歴史的現在で定位された地点を現在時として使用されている．しかしながら迂言的未来形が使用されている箇所では「パリは…を試みようとする」,「人々は…に参加しようとする」など定位された現在時からすぐ近くの未来が述べられ，現在と密接に繋がっていることがわかるのに対し，FH で示された箇所は現在時から跳躍し，その事象の実現が時間的に近いかどうかとは関係がない.「人々は…自己の手に握るであろう」はもしかしたら時間的にすぐに実現するかもしれないし，しばらくした後かもしれない．または実現されないかもしれないし違う事象が起こるかもしれない．このように，迂言的未来形は未来の決まったある一方向へ進むことが暗示されるが，FH で示された事象はその時点では未来として開かれているが，他にも様々な潜在的可能性を有していることが暗示されている．迂言的未来形はこのように決まったある一方向へ進むことを示すという特徴が現在とのつながりを浮き彫りにするため，これが迂言的未来形が近い未来を表すと言われる理由の一つになっているのかもしれないが，この問題は本稿の研究から外れるためここではこれ以上問わないこととする．一方 FH は，時間的なつながりを示すのではなく，複数の潜在的な可能性を提示すると同時に，その中のある一つの事象が選択され，これからその実現の方向に向かうという方向性を示していると思われる．このように同じある一方向へ進むことを示している二つの未来時制だが，明確な違いは潜在的可能性の暗示の有無であろう．これが開かれた未来形と閉じられた未来形という違いを生み出しているのではないかと考えられる．

4.2.における FH を表す FS の観察から，次の特徴があると考えられる．一般的に言って歴史的叙述とは過去の出来事を述べることであり, その出来事は既に決定され, 閉じられたものである．しかしながら FH を導入することによって，その事象は様々な潜在的可能性を持っていた開かれたものになる．既に終わった過去の叙述でありながら未来への投企性があることは矛盾しているようだが，このずれが単調な歴史的叙述のスパイスなっているのではないだろうか．この FH の特徴により歴史的叙述に物語的効果が付与されていると考えられる．また，FH は物語的叙述の

盛り上がりに匹敵する効果を示すのではないかという仮説を提示をしたが，FH が用いられたその事象を一連の流れの最終地点に設定するからには，そこには書き手の何らかの主観があると思われる．しかしながら，こうした問題の詳しい検討は次章で行う．

以上の分析をさらに深めるために, このコーパス分析を基にした FH を示す FS に関する理論的展開を次章で行っていく．

5. 理論的分析

第 3 章の先行研究の考察では FS の用法分析を観察したが，これまで見てきたように，歴史テクストというジャンルにおける FH の場合，短文から観察する用法研究のみでは不十分である．また，第 4 章はコーパスのみの分析のため，FH の機能全体を明らかにするためにはより大きなレベルの理論的な探究が必要であり，第 4 章の考察を補わなければならない．したがって本章では，FH に関する理論的探究を，以下の二つの視点から検討していく．5.1.では時間というものの表現方法の複雑さを, 言語学のみならず人間科学全体の視点から分析し, 時間概念の考察を行う．つづいて，5.2.では，歴史的叙述における時間的な展開の多様性を示すために，FH と共起する時制と FH との関係性及び差異について研究していく．

5.1. 時間概念の考察

この節では,「時間概念の複雑さ」(5.1.1.),「discours と histoire」(5.1.2.),「可能世界と信念世界」(5.1.3.) という 3 つの視点から，FH が出現する歴史テクストというものを検討していく．なぜなら，以下のような考察が必要だからである．まず，FH の問題を考えるためには時間という概念の詳しい検討をしなければならず, さらに, FH が言語活動における Benveniste が提唱した discours と histoire という二大カテゴリー内でいかなる機能を持っているかという研究が重要となる. 最後に，未来形によって示される世界の広がりに対する考察によって FH の特徴をより明確化していく．

5.1.1. 時間概念の複雑さ

まず，歴史叙述を考えるうえで基礎となる，時間の概念を見ておかなければならない．

一般的に，われわれは時間というものを過去・現在・未来という一本の時間軸で成り立つものとして考えている．しかしながら，多くの哲学者や歴史学者，言語学者が時間概念は一つではなく, 複数あると主張している [10]. Ricœur (1985) は時間概念の現象学的に分析において, Benveniste の時間概念に注目している．Benveniste (1974) は，時間とは,「物理的時間 temps physique」,「時系列的時間 temps chronique」,「言語的時間 temps linguistique」の 3 つに区別できるとしている [11].

[10] たとえば，Marc Wilmet (2007, pp.314-315) は «temps cosmique», «temps climatique», «temps physique», «temps humain», «temps relatif», «temps de conjugaison», «temps linguistique», «temps verbal» の 8 つの時間を挙げている．フランス語の temps は日本語では「時間」と「時制」の両方を示すため，Wilmet がここで挙げている temps の一部は「時制」であることに注意しておく．

[11] Ricœur は永続する時の流れを示す宇宙的時間 (temps cosmique) と主観的時間である生きられた時間

物理的時間とは，「一様・無限・線的で，思うままに分割可能である連続体」[12] としている．これは普遍的時間とも呼ばれ，われわれの存在とはまったく関係のない，何物にも侵されることのない時間である．これに相関するものとして心的時間を挙げており，これは「個人のその時の状況で感情や精神状態に応じて感じる長さが変わる，人間にとっての無限で持続的な時間である．」[13] だと述べている．

つぎに，時系列的時間とは，社会化された暦の時間であり，「出来事を序列化する時間」[14] (Benveniste 和訳書[15], 2013, p.69) であるとしている．「静的基準点 (著者注記：イエス・キリストの誕生など) から見て，出来事は以前 (過去)・以降 (未来) のいずれかに配置され，基準点からの距離が計量できるように時間的区分のいずれかに収められる (基準点から何年前 (後)，次いで何月，何日，という具合に)．各々の一定間隔の区分 (年，月，日) が，均質で隙間のない無限の連なりの中に並んでいる．こうして出来事は個々の区分との関係で時間の連鎖の中に正確に位置づけられる．」[16] (ibid., p.70) これにより時間的流れに共通知としてのゼロ地点を導入することができ，出来事とゼロ地点との距離を捉えることが可能になり，われわれの今居る位置もわかるようになる．

さいごに，言語的時間については次のように述べている．「言語に内在的な唯一の時間はディスクールの中の基準点的な現在であり，この現在は常に暗黙に前提とされている」[17] (ibid., p.73). さらに，「言語は必然的にある基準点から出発して時間を序列化するもので，この基準点はディスクール行為の外にはない．この参照的基準点を移動させ，過去や未来に置こうとしても無駄である．」[18] (ibid., p.73) つまり，発話することによって生まれる今という時を語ることによって基準点がはじめて生まれ，それと同時に基準点から見た過去と未来が生まれるのである．

では，この過去と未来とはどのようなものなのであろうか．Benveniste は「過去形と未来形の扱いの違いは，言語の世界において一般的であるだけに示唆的である．過去の経験が現在との距離に応じてそれぞれ配置される回顧的時間性と，われわれの経験の領域には入らず，経験の予測

(temps vécu) の中間的時間として，時系列的時間を置いている．

[12] Le *temps physique* du monde est un continu uniforme, infini, linéaire, segmentable à volonté. (Benveniste, 1974, p.70)

[13] Il a pour corrélat dans l'homme une durée infiniment variable que chaque individu mesure au gré de ses émotions et au rythme de sa vie intérieure. (ibid., p.70)

[14] 原書では le temps des evenements (ibid, p.70) となっており，和訳書の意訳と思われる．

[15] エミール・バンヴェニスト(著)・阿部宏(監訳)・前島和也ほか(訳) (2013)：『言葉と主体－一般言語学の諸問題－』岩波書店．から引用した．

[16] A partir de l'axe *statif*, les événements sont disposés selon l'une ou l'autre visée *directive*, ou antétieurement (en arrière) ou postérieurement (en avant) par rapport à cet axe, et ils sont logés dans une division qui permet de *mesurer* leur distance à l'axe : tant d'années avant ou après l'axe, puis tel mois et tel jour de l'année en question. Chaqune des divisions (an, mois, jour) s'aligne dans une série infinie don't tous les termes sont identiques et constants, qui n'admet ni inégalité, ni lacune, de sorte que l'événement à situer est exactement localisé dans la chaînechronique par sa coïncidence avec telle division particulière. (ibid., pp.71-72)

[17] On arrive ainsi à cette constatation (...) que le seul temps inhérent à la langue est le présent axial du discours, et que ce présent est implicite. (ibid., pp.74-75)

[18] La langue doit par nécessité ordonner le temps à partir d'un axe, et celui-ci est toujours et seulement l'instance de discours. Il serait impossible de déplacer cet axe référentiel pour le poser dans le passé ou dans l'avenir ; (…). (ibid., p.74)

という形でしか時間化されない前望的時間性との間には，明らかな性質の違いがある」[19] (ibid., p.74) と述べている．Koselleck (1990) は過去と未来をそれぞれ「champ d'expériences 経験の空間」と「horizon d'attente 期待の地平」と呼び [20]，Ricœur (1985) は経験の空間と期待の地平に関して，「過去に遡及する期待なしには収集され得ないというのが，経験の時間的構造である」[21] (Ricoeur 和訳書[22], 1990, p.384) という Koselleck の言葉を引用している．さらに Ricœur は,「過去を成就し，変えられない，過ぎ去ったものという見方でしか考えない傾向に対してたたかう必要がある．過去を再び開き，まだ成就していない，阻まれた，さらには虐殺されてしまった過去の潜在性を蘇らせなければならない」[23] (ibid., p.394) と述べている．さらに山口 (2000) は，以下のように述べている．「過去の大部分は，個人の生活史においても，一つの文化の歴史においても，影の，忘却の，闇の部分にとどまっている．(…)．反省的思考を欠いた歴史研究が掘り起こすことができるのは，それらのわずかな部分に過ぎない．」(山口, 2000, p.235) と，また，「過去の中の過去，現在の中の過去を掘り起こすことによって，それらに光をあて，(…)」(ibid., p.236) と言っている．

つまり，未来を述べることは同時に過去に影響を及ぼす．過去を開き，過去の潜在性に光をあてることである．歴史は過去であるためすべての出来事が既に決定されたものであり，われわれの生きている現在へとつながる一つの時間軸上に位置づけられる，とする考えは，一つの歴史の捉え方であって，歴史という概念に対する他の見方もあるのである．

以上のことを，歴史叙述に関して時間概念と動詞時制の面から考えてみよう．歴史叙述とは，一般的に，話し手が存在しない客観的なものであるので「時系列的時間」をベースとして叙述される．つまり，出来事を時系列的時間の中に位置づける行為が歴史叙述の本質である．したがって, そこで用いられる動詞時制は主観相をもたない単純過去形がベースとなることが妥当である．しかしながら，歴史叙述には現在形や FS が出現する場合があり，現在が存在しない時系列的時間と矛盾する．未来形を使用するからには立脚する現在の存在が必要となる．その現在は「言語的時間」にしか立脚できないものである．したがって，歴史叙述は「言語的時間」に基づき表現されることが可能となる．Benveniste (1974) は言語的時間について，

(49) 「話者は，現在として認めるものを，特有の言語学的形態を通じて，それがどの時点で

---

[19] Ce contraste entre les formes du passé et celles du futur est instructif par sa généralité même dans le monde des langues. Il y a évidemment une différence de nature entre cette temporalité rétrospective, qui peut prendre plusieurs distances dans le passé de notre expérience, et la temporalité prospective qui n'entre pas dans le champ de notre expérience et qui à vrai dire ne se temporalise qu'en tant que prévision d'expérience. (ibid., p.76)

[20] Koselleck (1990) のドイツ語版著作 (1979, p.358) では，Erfahrungsraum が champ d'expériences, Erwartungshorizont が horizon d'attente に値する．
Ricœur は *Temps et récit* (1985) の中で，champ d'expériences を espace d'expérience と仏訳している．
Koselleck, R. (1979) : *Vergangene Zukunft. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten*, Frankfurt, Suhrkamp.

[21] «C'est une structure temporelle de l'éxperience de ne pouvoir être rassemblée sans attente rétroactive » (Ricœur, 1985, p.302)

[22] ポール・リクール (著)・久米博 (訳) (1990) : 『時間と物語Ⅲ 物語られる時間』新曜社.

[23] (...), il faut lutter contre la tendance à ne considérer le passé, que sous l'angle de l'achevé, de l'inchangeable, du révolu. Il faut rouvrir le passé, raviver en lui des potentialités inaccomplies, empêchées, voire massacrées. (Ricœur, 1985, p.313)

あれ，すべて「現在」として位置づける．しかし，この現在は発話のたびに更新される，文字どおり新たで未経験な瞬間なのである」[24] (Benveniste 和訳書[25]，2013, p.72)

とも述べている．したがって，時系列的時間に位置づけられた出来事を基準時の現在と定位することによって，歴史叙述に FS が用いられることが可能となるのである．つまり歴史叙述とは「時系列的時間」のなかに「言語的時間」も持つ，複雑な構造を内包する叙述方法なのである．

Ricœur (1985) は未来を指す「期待の地平」の「期待という用語は，希望と恐れ，願望と欲求，懸念，(…)，あらゆる気持のあらわれを包含できるほどに広い」[26] (Ricoeur 和訳書, 1990, p.383) と述べている．つまり未来は主観相も内包しており，したがって，歴史叙述において FS によって未来を述べるということは，話し手 (書き手) の主観相や期待相がテクストに導入されることを意味している．

歴史叙述とは時系列的時間に位置づけられている出来事を述べることであるが，それぞれの出来事に対して言語的時間を通して記述できる．出来事を歴史的現在を用いて現在として定位するたびにそれは新たで未経験な瞬間として描写されるため，言語的時間の FS を用いることができるようになるのである．

5.1.2. discours と histoire

Benveniste (1966) は，フランス語の動詞時制を histoire と discours という 2 つのレベルに区別可能だとしている [27]．discours とは「話し手と聞き手とを想定し，しかも前者においてなんらかの仕方で後者に影響を与えようとする意図のあるあらゆる言表行為」[28] であり，動詞時制は単純過去形を除くあらゆる時制が使用されるものだとし，一方 histoire は「物語のなかに話し手が全く介入することなく，ある時点に生じた事実を提示するもの」[29] であり，使用される動詞時制は単純過去形，半過去，条件法，大過去，予見時称 (allait / devait +inf) [30] であると定義づけている．Benveniste のこの概念を参考に，以降さまざまな研究者が多少の違い (histoire ではなく récit としたり，分類する動詞時制の違いなど) はあってもおおまかにこの 2 つの区別を肯定している．

---

[24] Le locuteur situe comme « présent » tout ce qu'il implique tel en vertu de la forme linguistique qu'il emploie. Ce présent est réinventé chaque fois qu'un homme parle parce que c'est, à la lettre, un moment neuf, non encore vécu. (Benveniste, 1974, pp.73-74)

[25] エミール・バンヴェニスト(著)・阿部宏(監訳)・前島和也ほか(訳) (2013) : 『言葉と主体ー一般言語学の諸問題ー』岩波書店.

[26] (...), le terme d'attente est assez vaste pour inclure l'espoir et la crainte, le souhait et le vouloir, le souci, le calculrationnel, la curiosité bref toutes les manifestations privées ou communes visant le futur ; (...). (p.302)

[27] Weinrich (1973) や他さまざまな先行研究において discours / histoire の二分法は commentaire / récit, discours / récit など様々な言われ方をされるが意味的にはほぼ変わらないため，本稿では Benveniste にしたがい，discours と histoire と呼ぶことにする．

[28] Il faut entendre discours dans sa plus large extension : toute énonciation supposant un locuteur et un auditeur, et chez le premier l'intention d'influencer l'autre en quelque manière. (Benveniste, 1966, p.242)

[29] Il s'agit de la présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit. (ibid., P.239)

[30] 本稿では予見時称の allait + inf と迂言的未来形(va + inf)を区別する．

Discours	histoire (récit)
passé composé　　imparfait présent futur simple　　futur périphrastique	passé simple　　imparfait prospectif (allait / devait + inf)

図 B : discours と hostoire の主要な時制の区分

これまでの先行研究において共通しているのは，FS が discours に属するものだとしている点である．Mainguneau (1999) は,

(49)　Les futurs, futur simple et futur périphrastique (*tu partiras / tu vas partir*), relèvent uniquement du *discours* : de fait, ils sont le résultat de visées de l'énonciateur vers l'avenir à partir de son présent.　(Mainguneau, 1999, p.76)
(単純未来形と迂言的未来形という二つの未来形は discours のみに属する：実際，それらは発話者の現在から未来に対する照準の結果である．)

と述べ, FS は完全に histoire には出現しないと断言している. また, Novakova (2001, p.86) は histoire に出現する FS を奇異なもの (insolite) であるとし，Benveniste (1966) はそれは文体的技巧 artifice de style であると[31]，Confais (1995) は映画の flash back と同じ語りの技巧 artifice narratif であると述べ，通常は histoire には出現しないと分析している．

5.1.1.で見たように，過去と未来は基準時となる現在を定位しないことには存在しない．このことから，過去と未来は現在を基準とした時間軸の対極にあるものとして捉えることができる．図 B も踏まえた以上のことを図 C で図式化してみる．

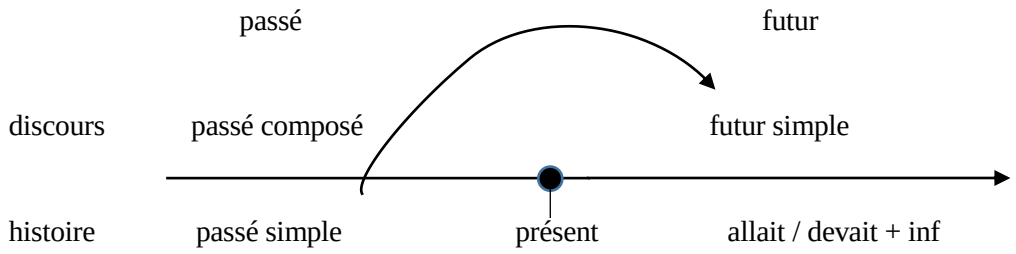


図 C

[31] Benveniste は «Nous ne parlons pas ici, bien entendu, du « présent historique » des grammaires, qui n'est qu'un artifice de style.» (p.245) と述べ，厳密には語りの現在を文体的技巧であるとしているが，歴史的現在に関して触れている中で歴史的未来も同様だとしているため，artifice de style は歴史叙述における単純未来形にも当てはまることである．

histoire に属し過去に関する叙述である歴史叙述において単純過去形をベースとしていることは，同じ histoire に属するものとして妥当性がある．単純過去形から複合過去形への変化は並行する語りへの移行として違和感はない．単純過去形から現在形 (歴史的現在) への移行は，本来現在形には時間性がないとする従来の考えより歴史叙述に用いられることに違和感はない．しかしながら，過去叙述のため通常単純過去形で叙述するところを FS (FH) にした場合，そこには語りの移行だけではなく時制の移行も起こり重要な二つの面で変化が発生する．これはまさに飛躍と言うことができる大きな変化である．したがって，FS をわざわざ歴史叙述に導入するということは，それはやはり書き手のレトリックとして問題があり，この飛躍に付随する効果を意図して用いていると考えられる．

この語りと時制という二つの面での変化が，FH が有する飛躍という機能の根拠となると考える．これについては 5.2.で詳しく述べることとする．

歴史叙述における FS の出現が従来の先行研究では想定されていなかった理由の一つとして，客観的な histoire と主観的な FS は相いれないと考えられてきたことがある．

histoire では未来を表す際には予見時称を用いるとし，discours の FS，histoire の予見時称として区別されてきた. しかしながら, 文語と口語として考えるならばこの区別も可能かもしれないが, 歴史叙述においてはこの区別は適当ではない. それには, 同じ histoire であっても物語を作ることと歴史を語ることは異なるということが関係していると思われる．歴史を語ることには，書き手の主観が必然的に付随してくる．歴史叙述について山口 (2000) は以下のように述べている．

(50) 「多くの場合歴史のディスクールは，日常生活のすべての描写が反映するのではなく，一定の部分を排除することによって, それは成り立っているのである.」(山口, 2000, p.223)

これは，叙述される歴史は歴史のすべてではなく，書き手によって選択された一部の側面にすぎないということを意味する．したがって，そこには書き手が出来事に対して期待したり失望したりという何かしらの感情が内包されていると考え得る．それを示すマーカーが FH なのではないだろうか.

歴史叙述は客観的性質を持ちながら，主観的な FS が用いられている．つまり，歴史叙述に出現する FS である FH は，histoire の客観性と discours に属する FS の主観相を併せ持つキメラ状態であると言える．したがって，FH はもはや FS の用法のひとつではなく，歴史叙述というジャンルにおける一つのスタイルと考える方が適当ではないだろうか.

5.1.3. 分岐的時間：可能世界と信念世界

分岐的時間という概念を用いて，第 4 章で提示した，FH による過去叙述が他の選択肢の潜在性を暗示するという仮説を，Martin (1983) と渡邊 (2014, pp.59-82) の考えと図説を用いて検証していく．

Martin は，ある時点 t における可能性は，t_{+n} における p が真である場合 (P) と偽 (non-P) であ

る場合のふたつの分岐があると主張している．(図 D)

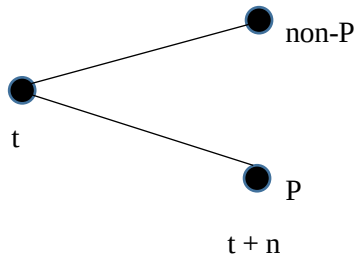


図 D

さらに，t_{+n} においてこの真と偽の分岐が想定され，以降事行の発生のたびに無数に続いていく．この分岐的時間において真 (P とする) と偽 (non-P とする) が現れるそれぞれの時点 (黒丸) を可能世界 (mondes possibles, 略号 m) という．可能世界の中でも，実現しそうな連鎖を表すものを期待世界 (monde des attentes, m*) という．期待世界も可能世界と同様破棄されることがあり得る．また，時間がたち，未来が過去となるとき，可能世界のうち一つの事項だけが現実世界 (monde de ce qui est, m_0) を示すものとなる．過去・現在の時間は現実世界に属し直線的時間である．さらに，話者が真と信ずる命題の総体を信念領域とし，可能世界，期待世界，現実世界はいずれも信念領域 (univers de croyance, U) に属すると述べている．(図 E)

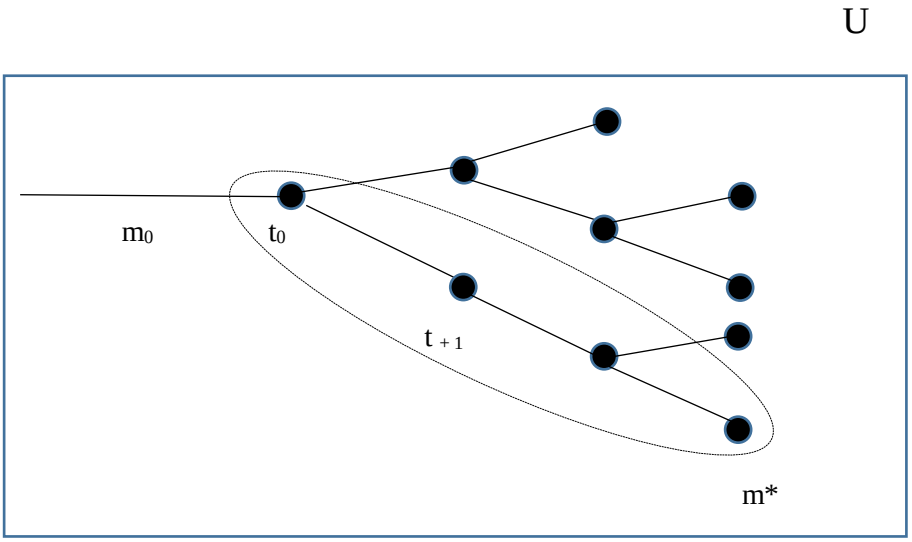


図 E

上述の概念をもとに，まず FS を見よう．発話時 t_0 に立脚する FS は，t_0 より後の t_{+1} に事行を位置づける際に用いられる．t_0 においては t_{+1} は未来のことであり事行の成立が不確実である．したがって t_{+1} における non-P の可能性が必然的に発生し，図 D に当てはめることが可能であり (図 D に t を t_0 に，t_{+n} を t_{+1} として当てはめる．)，FS には暗黙に分岐的時間を表象する働きが認められる．

それでは，FH はどうであろうか．Martin は過去・現在の時間が属する世界は直線的時間である現実世界 (m_0) であるとしている．(図 E 参照) したがって過去の既に達成された出来事に関して述べる歴史叙述は，一見すると真 (P) しか存在せず直線的時間軸上で表されても良いはずである．しかしながら，われわれはそれに異を唱える．その理由として，歴史叙述とは言うまでもなく歴史的出来事すべてについて語るものではなく，書き手が出来事の一部を選択して叙述しているにすぎず，また，新たな史料の発見などにより過去の出来事が変わる可能性が存在しているからである．このように，歴史叙述において基準時より後に事行を定位する FH は，FS と同様に分岐的時間を有しているのである．

しかし，分岐的時間における真 / 偽の対立は，歴史叙述においては少し異なる．FH 以外の FS ではその基準点から見た未実現性ゆえに可能世界が存在し，話し手が最も実現の期待が高いと考える出来事を期待世界に位置づけ P と表していた．歴史叙述では，書き手によって選択された出来事・現在一般に事実だと認識されている出来事を P (真) と置き，それが起こらなかった可能性 (偽) の中に他の様々な出来事が起きた可能性を潜在的可能性として (non-P) と定位する[32]．これをここでは潜在的世界 (monde potentiel, MP) と呼ぶことにする．そして話し手が真と信ずる命題の総体である信念領域 (U) を，歴史叙述では潜在的世界を含まない，書き手によって真だと選択され語られる出来事の総体とする．

ここで，歴史叙述の時間は発話時 t_0 が基準となる時間軸と異なることを表すために，二つの異なる時間軸を導入したいと思う．一つはわれわれが実際に生活している日常的な時間軸であり，もう一つは歴史叙述の際に用いられる時間軸である．前者を現実時間，後者を歴史叙述的時間と呼ぶこととする．現実時間では，時間は常に未来に向けて進行し，われわれは現在時 t_0 に位置し，その時点から見て時間の進行方向が未来 t_{+n} であり，その逆方向が過去 t_{-n} である．一方歴史叙述的時間においてもそれぞれの互いに対する位置関係は同じだが，歴史叙述の現段階を疑似的に発話時 t_0 に準ずる時点として扱うことを表すために，t_0^1 とする[33]．t_0^1 は現実時間の t_{-n} に位置する．以上を図で表したものが図 E である．

以上は，動詞時制の機能を考える際に，発話時に立脚する discours レベルと基準時を恣意的に定位する histoire レベルでは明確に区別しなければならないことも示している．

---

[32] Lansari (2009) や Culioli (1990, 1999a, 1999b) では，non-P と autre que P の両方を指すものを P’としている．

[33] Lansari (2009) 第 5 章 (p208) を参考とする．

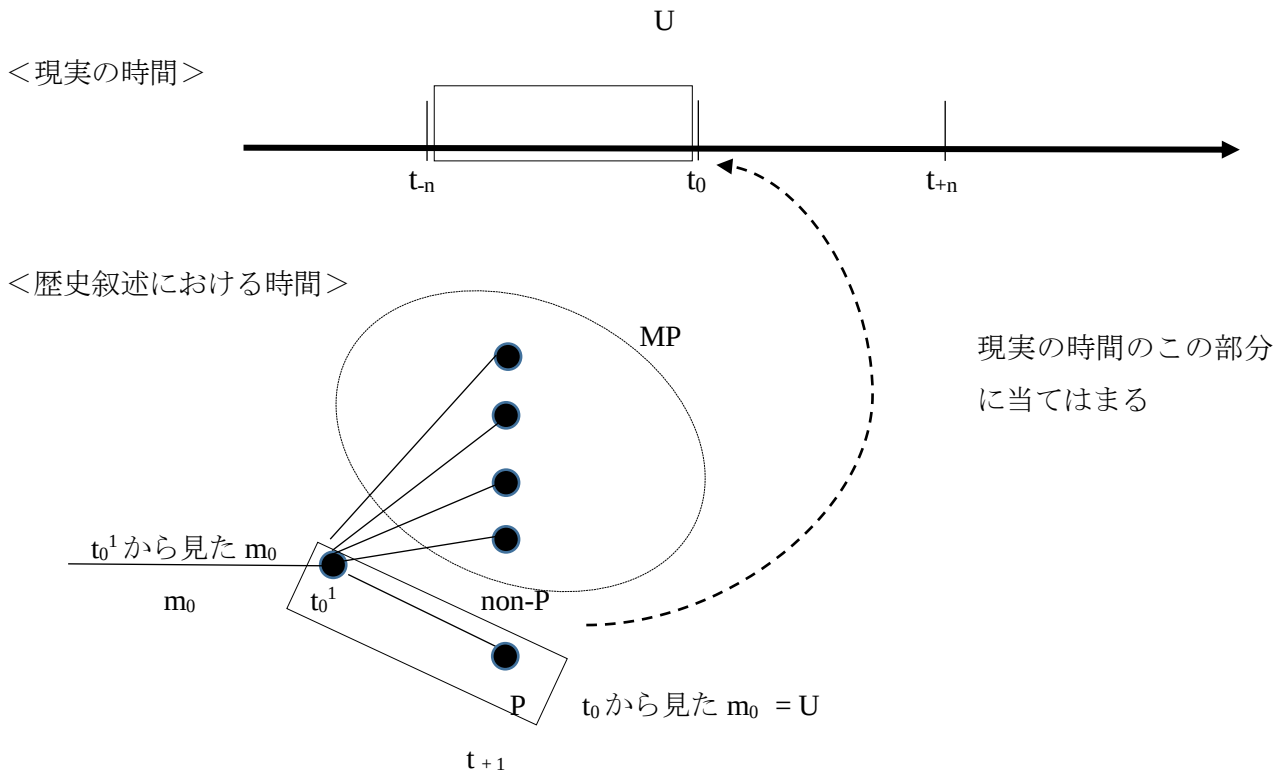


図 F

ここで，一般的に過去における未来を表す際に用いられる動詞時制の条件法と歴史叙述において用いられる FH の違いを分岐的時間の概念から見てみよう．

条件法は形態的に－r + ait という avoir の過去形が組み込まれているように, t_{-1} という基準を明示している時制である．したがって視点 PDV が過去に置かれる．

(51)　Il pleuvait. Le match **aurait** donc lieu en salle.

(雨がふっていたので，試合は室内でおこなわれることとなった．)

(Confais, 1990, p.294, cité par 渡邊 2014, p.68)

これを図にすると次のようになる．P は発話時点 t_0 に直接定位されるのではなく，あくまでも PDV (t_{-1}) を介して，PDV (t_{-1}) からの後方性として定位される．そのため，P と t_0 との直接の前後関係はきまっていない．(渡邊, 2014, p.68)

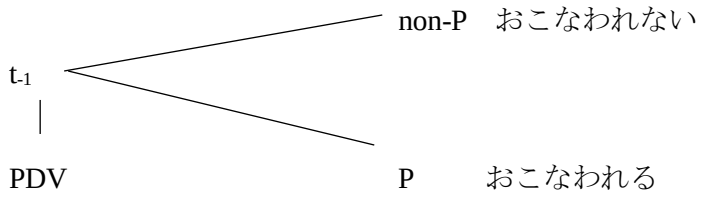


図 G

また，条件法は視点が過去に置かれるため，結果的に，たとえば反実仮想の性質を表しうる．

(52) […] s'il avait la chance de prendre un beau poisson, en dessous de l'écluse du canal, on le **vendrait** et on **achèterait** du pain.
(運河の水門の下で立派な魚をとることができたら，それを売って，パンを買うことができるだろうに．) (E. Zola, *Germinal*, p.192, cité par 渡邊 2014, p.69)

(52) を図にすると次のようになる．

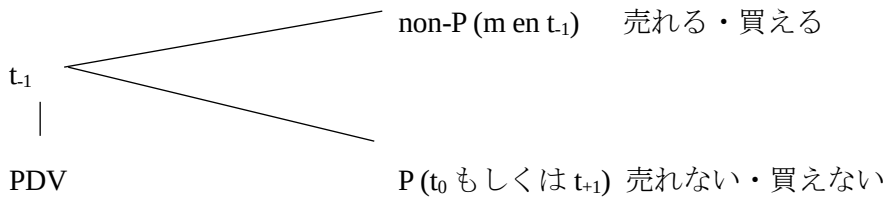


図 H

過去に起きた事実を提示していく歴史叙述と話し手や書き手の主観である反実仮想，つまり P ではなく non-P を望む条件法は相いれない．条件法が反実仮想用法を有していることは histoire である歴史叙述において条件法を用いると時制的条件法とも反実仮想の条件法とも両方解釈できることになる．つまり，条件法は期待世界を持たないため不確実性が強い．

一方 FS は不定法形態素－r, および a という avoir 現在形から構成されており，実際には過去に関する叙述でも過去ということが明示されず，視点 PDV も歴史的現在に定位されるため，純粋に事行が定位された基準時より後に成立するものだという前望的な時間的展開を示すことができる．このことを図 I で図説しよう．

(53) *22 avril*. - La cour martiale prononce (malgré Rossel) l'acquittement d'un colonel trouvé en état d'ivresse condamne à des peines relativement. légères des gardes accusés d'indiscipline et decide la dissolution d'un bataillon, le 105e. La Commune **cassera** l'arrêt. (第 7 部 1 章, p.377)
(四月二二日— 軍法会議は (ロセルの意に反し) 酔態をとがめられた一大佐の無罪放免を宣し，規律違反で告発された衛兵たちに比較的軽い判決を下し，さらに第一〇五大隊の解散を決定する．コミューンはやがてこの判決を破毀するであろう．)
(和訳書『下』[34], p.309)

[34] ルフェーヴル, H. (著)・河野健二ほか(訳) (2011) :『パリ・コミューン』(上) (下), 岩波書店.

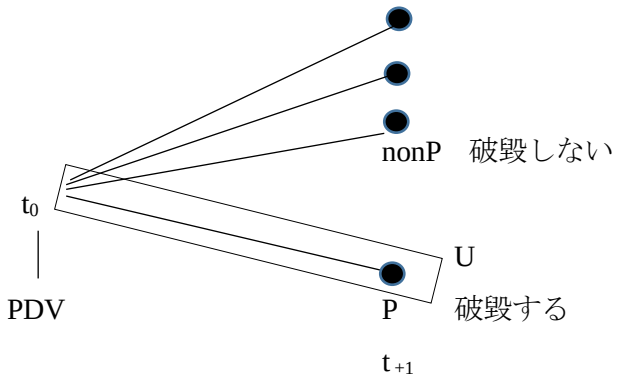


図 I

(53)の「La Commune **cassera** l'arrêt.」を条件法を用いた文「La Commune **casserait** l'arrêt.」に変えると，反実仮想の「破毀しない」という解釈も否定できない．

このように，条件法は結果的に反実仮想のアスペクトを持つゆえに，FH に比べ確実性が弱い．(Martin 1983, pp.133-134 が，「条件法が一般の可能世界を指示し，単純未来形が可能世界のなかで蓋然性の高さによって卓立された期待世界を指示する」との仮説をたてていることを参照)　この確実性の弱さもまた，過去のすでに発生した事実を述べる歴史叙述と条件法が相いれない理由の一つである [35].

以上のような性質の違いにより，歴史叙述において未来を表す際 (間接話法内以外) には，条件法ではなく FH が好まれると思われる．また，分岐的時間が過去においても適用される FH の潜在的可能性の暗示機能を確認したが，これは過去が開かれたものであることも示している．単純過去など分岐的時間を持たない動詞時制による叙述と FH を用いた叙述における効果の違いの一つに，この分岐的時間提示の差異にもとづく開かれた過去の表象機能が挙げられるだろう．

5.2. 歴史的未来と共起する時制

この節では，統辞形態論的，意味論的および語用論的な視点から，第 4 章で行ったコーパス分析を深化させる FH と FH と共起する時制に対する研究を行おうと思う．まず 5.2.1.「歴史的現在と FH の共起」では，時制を考えるうえで常に中心となる時制である現在形が歴史テクストにお

[35] 同じhistoireに属するが物語や歴史小説では異なると考える．なぜならば，これらは事実の叙述ではなく，また登場人物の主観相との関係が大いに考えられるからである．しかし歴史叙述を研究対象とする本稿では分析しない．
また，*Grand Larousse* では以下のように指摘している．
(i) Là même où le conditionnel serait le temps propre, des écrivains modernes usent du futur en vue d'un effet de recentrage psychique analogue à celui qu'on obtient par le présent de narration. (*Grand Larousse*, p.2117)
(条件法が適切な時制であるところでさえ，現代の書き手は語りの現在によって得られるものに類似した心的センタリング効果を狙って，未来形を使用する．)
(ii) Elle calcula qu'elle **s'enfuira** dès que Cesare **sera** dans sa chambre (R. Vailland) (ibid., p.2117)
(彼女はセザールが寝室にいるやいなや，逃げることを選んだ．)
つまり，条件法ではなく FH を用いる理由の一つとして，FH は歴史的現在で定位された虚構的と呼びうる現在時に立脚することで，読み手の心的距離を物語に引き寄せ，臨場感をもたらす効果があると述べている．しかしながら，これは物語における効果と考えられる．

いて用いられる場合の特徴と，FH の場合との違いを観察する．つぎに 5.2.2.「過去形と FH との共起」において，過去形との共存を歴史叙述で用いられる際の時制の時間軸がどのように示されるかについて分析し，さらに 5.2.3.「迂言的未来形と FH を示す FS との共起」で，FH と迂言的未来形という二つの未来形が歴史叙述においてどのように使い分けられているのかを明確化していきたい.

5.2.1. 歴史的現在と歴史的未来の共起

第 4 章の検討の結果を考慮すれば，歴史的現在は時間軸上で継起的に出来事を述べるという叙述特徴があり，いわば，点的に現在が並置されていく (出来事間の時間的間隔は決まっていない) という点的な記述方法である．それゆえ，もしも，歴史的現在のみによって歴史的な出来事が描写されたならば，時間的な飛躍性を示すことが不可能となり，時間軸に沿った事実の羅列に過ぎなくなり，歴史的現在で示される各時点であたかもその出来事ひとつしか存在しなかったかのような印象を与えることになる. 言い換えると, 過去が閉じられていると言うことができるだろう. (図 J．以降，図においては歴史的現在は présent historique, PH と略号)

図 J : 歴史的現在のみによる歴史記述

一方 FH はというと，まずある定められた基準点の存在なしには用いることは不可能である. なぜなら未来は常に出発点を必要とするからである. 後の 5.2.2.でも述べるが, 過去も同様である. 過去や未来はある時点を現在と見なすことによって発生する時間であるからして，FH は歴史的現在に依存していると言える．形態論的視点においても，FS の活用語尾 (－rai －ra －ra －rons －rez －rons) には avoir の現在形が含まれていることから，現在形との強い結びつきが内包されていると述べ得る.

歴史的現在で継起的に述べられている時間軸上において，連続的な時間の流れを跳躍した先の出来事を表す際に FH は用いられていることを第 4 章で観察した．いわば事実の先取りであり，点的連続から飛躍的展開へと描写の速度が一挙に速まっている．この先取りを図説すると以下に示す図 K のようになる.

＜時制による時間表示＞

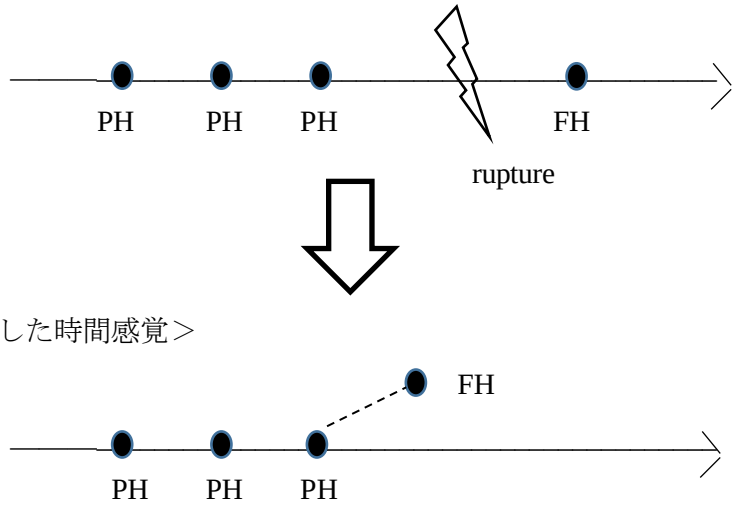


図 K : FH の牽引効果

以下，「飛躍的展開」にかかわる事例を，コーパス中の実例に即して検討してみたい．
まず，段落の末尾で独立的に FH が現れる例をいくつか見ておこう．

(54) La position politique de ces hommes (parmi lesquels on remarque les noms de plusieurs dirigeants de la Commune) est renforcée du fait qu'ils commandent des bataillons de la garde. Flourens est chef d'un bataillon de volontaires ; Jaclard, blanquiste, élu adjoint dans le XVIIIe, commande le 138e bataillon et Ranvier le 141e. Le gouvernement les poursuit, les révoque ; les électeurs les soutiennent. Le nombre des voix recueillies par les « rouges » dépasse celui des « non » au référendum plébiscitaire. Le gouvernement dit de la défense nationale veut que les maires et adjoints n'aient que le caractère d'agents de l'exécutif. Il **aura** devant lui des patriotes et des révolutionnaires qui **soulèveront** contre le pouvoir d'État les quartiers de Paris.

(第 4 部 1 章, p.177)

(これらの人々 (そのなかにはコミューンのいく人かの指導者の名前が見える) の政治的立場は，彼らが衛兵大隊の指揮をとるという事実によって強化される．フルーランスは志願兵大隊長であり，第一八区で助役に選出されたブランキ派のジャクラールは，第一三八大隊を指揮し，ランヴィエは第一四一大隊を指揮する．政府は彼らを追及し解任するが，選挙人は彼らを指示する．《赤》が集めた票数は，国民投票のさいの《反対》の数を上回る．国防という名をもった政府は，区長や助役が執行の手先としての性格しかもたないことを希望する．しかし政府は，国家権力に抗してパリの地区を**立ち上がらせることになる**愛国者や革命家を目の前に**もつことになるだろう**．) (和訳書『上』, p.310)

ここでは，和訳で追加的に用いられている「しかし」でも明らかなように，段落の最後で FH を用いた文により話題転換が行われている．そこでは，それまでの一連の継起的な事行の流れか

らはずれ，後の成り行きを先取りするかたちになっている．段落の最後でこのように先取りとしての飛躍効果を持つ FH が用いられることによって，一連の物語的展開が終わることを示している．

つづいて類例を見ておきたい．

(55) Rive gauche, trois bataillons bourgeois, dans le VIe ont été neutralisés' par le 59e après des pourparlers habilement menés par Allemane. Duval progresse lentement mais sûrement vers la Cité. Aux approches de la préfecture de police (alors près de la place Dauphine) il envoie des éclaireurs. Ceux-ci s'attendant à une décharge, veulent enfoncer la grande porte à coups de crosse. La porte s'ouvre, et le concierge, casauette à la main, demande : « *Messieurs, que désirez-vous.*? *Il n'y a personne. Vous êtes chez vous* ... » Duval accourt. Il est un peu plus de 10 heures du soir. Dès lors Duval accélère son avance. Il envoie un fort détachement place Notre-Dame achevant l'investissement de l'hôtel de ville.

Seul le Palais du Luxembourg appartient encore au gouvernement, pour quelques heures. Sans nouvelle du haut commandement, les officiers **se laisseront** désarmer. (第 5 部 2 章, pp.278-279)

(左岸では，アルマーヌによって巧妙にはこばれた交渉の後に，ブルジョア派の　三大隊が，第五九戦列歩兵によって第六区で無力化された．デュヴァルはゆっくりと，だが確実にシテ島へ前進する．警視庁に近づくと (当時はドフィーヌ広場の近くにある)，彼は斥候を送る．斥候は一斉射撃を覚悟して銃床で，門の大扉をたたき破ろうとする．扉が開かれ，帽子を手にした門番がだずねる．「皆さん，何の御用ですか？ここには誰もおりません．どうか，御自由に……」．デュヴァルが駆けつける．夜の一〇時をやや過ぎていた．そのときからデュヴァルは前進をはやめる．彼は市庁舎の包囲を終えてノートルダム広場に強力な分遣隊を派遣する．

リュクサンブール宮だけが，数時間にわたって，なお政府側に属している．上からの命令の通告を待たずに，士官たちは武装解除**されるままになるだろう**．)

(和訳書『下』, p.127)

この例は，「夜八時から真夜中」という題名の節の最後にあたる．その大きな節の区切りの直前で段落を改めることで話題転換を行い，FH を用いた文により後の出来事に対する独立的な先取りを行っている．この独立的な先取りはまさに FH の使用は一連の展開からの飛躍もたらすということを示す良い例である．

つぎに，丸括弧の中で出現する FH の例を見てみよう．

(56) Après ce sursaut, l'activité de la Délégation tombe. L'émeute du 22 janvier est préparée par les blanquistes (Sapia, qui **sera tué**, Raoul Rigault), par Flourens, par quelques bataillons populaires de la garde. Ce sont eux qui prennent l'initiative. Lors des élections générales du 8

février pour la formation d'une Assemblée nationale, 4 seulement des 43 candidats « socialistes révolutionnaires » appuyés par la Délégation sont élus, et seulement avec les voix des républicains modérés. La Délégation ne **sortira** d'une espèce de léthargie qu'après le 18 mars, au moment des élections pour la Commune. Elle reprend alors le titre de « Comité central des 20 arrondissements » et publie le 23 mars un premier manifeste électoral, puis un second et enfin un troisième, le lundi 27 mars. (第 4 部 1 章, p.191)

(この飛躍ののち，代表団の活動は衰える．一月二二日の暴動は，ブランキ派 (のちに**殺される**サピア Sapia, およびラウル・リゴー) や，フルーランス，衛兵のうちの若干の民衆大隊によって準備される．主導権をとるのは彼らである．国民議会を形成するための二月八日の総選挙にさいして，代表団の支持した《革命的社会主義者》の候補者四三人のうち四人しか当選しないし，しかもそれは穏健派の投票も加えてである．代表団が一種の昏睡状態から**脱する**のは，やっと三月一八日以後，コミューンの選挙のときでしかない．そのとき，代表団は再び《全二〇区中央委員会》の名称を復活し，三月二三日に最初の選挙宣言を, それから三月二七日の月曜日に第二および第三の宣言を発表する．) (和訳書『上』, p.335)

ここでは，丸括弧の使用により地の文から独立した挿入であることがわかる．そのなかで FH が用いられていることにより，出来事の流れとは関係がない後の展開の補足説明を可能としている．このように断絶と飛躍の性質をもつ FH は一連の展開から離脱し補足説明を行う丸括弧との親和性が高い.

つづいて，ー ー (tiret) と共に現れる FH を見てみよう.

(57) Pendant ce temps le général Lecomte explique à ses officiers (le capitaine Franck, le Commandant Poussargue, le capitaine Dailly, le capitaine Beugnot — qui **écrira** un récit des événements, sa version — plus deux autres officiers arrêtés sur les fortifications) qu' il tient Clemenceau pour le grand responsable, que c'est lui qui a excité la population. Il écrit un court billet en ce sens, accusant Clemenceau de duplicité. Dans son récit, le capitane Beugnot **reproduira** cette accusation. (第 5 部 2 章, p.262)

(この間に，ルコント将軍は部下の士官たち (フランク Franck 大尉，ブーサルグ少佐，デリイ Dailly 大尉，ブニョーBeugnot 大尉 — 彼はのちに諸事件についての物語，彼の解釈を**記すことになる** — それに城壁の上で捕えられた他の二人の士官)に, 彼はクレマンソーに大きな責任があると見なしていること，住民を興奮させたのは彼であることを説明する．彼はクレマンソーの二枚舌を非難して，この趣旨を短い紙切れに書く．ブニョー大尉は後にその物語で，この非難の言葉を**再録することとなる**．)

(和訳書『下』, p.94)

この tiret も先ほどの丸括弧と同様に，挿入の働きを有している．また，挿入部分は qui から始まる関係節を構成しており，tiret の機能と協調しあっている．この中で FH が用いられることによって，後の出来事を先取りして説明することが可能となっている．

さらに，時間副詞の共起を見ていこう．

(58) En haut de la rue Lepic, le Comité central et le comité local cle la rue des Rosiers avaient installé une pièce d'alarme. Toujours prête, la ficelle ne quittait pas l'étoupille et la sentinelle devait tirer le coup à blanc dès la première alerte. Le coup d'alarme ne fut pas tiré, on ne sait pourquoi. Se glissant dans l'ombre, les sergents de ville s'approchent alors de la tom Solférino qui domine la Butte. Tout à coup une ombre se dresse devant eux ; c'est le garde national Turpin, désigné par le comité de la rue des Rosiers pour monter la faction. Il crie : « Qui vive? „ et croise la baïonnette. Aussitôt les gendarmes l'abattent; il tombe, mortellement blessé, et **mourra** quelques jours plus tard. Les assaillants débouchent alors sur le plateau et désarment sans difficulté le faible poste de garde : 6 hommes du 61e bataillon. Ils se portent alors 'Vivement vers le n° 6 de la rue des Rosiers, siège du comité de vigilance, et font prisonniers quelques-uns des 18 hommes qui l'occupent et les jettent dans les caves de la tour Solférino. D'autres arrivent à fuir en tirant quelques coups de fusil. (第 5 部 2 章, p.241)

(ロジエ街の中央委員会と地区委員会は，一門の警砲ルピック街の高みにすえつけた．いつでも発射できるように紐が大砲の門管につけられていたし，歩哨は最初の急報があり次第すぐ空砲をはなつはずであった．だが警砲はなぜかわからないが発射されなかった．暗闇にまぎれて市警官たちはビュットを見下すソルフェリノ塔に近寄る．突然人影が彼らの前に立ちふさがる．それは，ロジエ街の委員会から見張りに立つようにと命ぜられた国民衛兵のテュルパンである．「誰か」と彼は叫び，銃剣をつき出す．すぐさま憲兵たちは彼を打ち倒す．彼は瀕死の重傷を負って倒れ，数日後**には死ぬ**．襲撃者たちはそこで丘の上に出て，手うすな哨所である第六一大隊の六人を難なく武装解除する．) (和訳書『下』, p.54)

ここでは，quelque jours plus tard との共起により，時間的跳躍がなされている．これ以前のなだらかな出来事の連続（継起）とは異なり，時間副詞を伴って，後の出来事に一気に跳躍している．FH で示されている文の後の事行は FH の文の前の事行と繋がっており，FH の流れからの離脱という性質が顕著に現れている例である．

時間副詞の例をもう一つ見てみよう．

(59) *2 heures du matin.*

Langlois s'est présenté à l'hôtel de ville. « Qui êtes - vous? » demandent les sentinelles. « Général de la garde nationale nommé par le gouvernement. » On le laisse passer.

Langlois exagère. Proposée par les maires et les nnmstres « préséents à Paris», sa nomination n'a pas encore été ratifiée par Thiers. Elle ne le **sera** ― provisoirement ― que quelques heures plus tard. Il a déjà envoyé à l'*Officiel* une proclamation (lui aussi) très lyrique, où il se déclare capable de *marcher au martyre.* (第 5 部 2 章, p.284)

(午前二時

ラングロワが市庁舎に現れた．「どなたですか」と歩哨がたずねる．「政府によって任命された国民衛兵の将軍だ」．彼は通行を許される．

ラングロワは誇張している．区長たちと「パリにいる」大臣によって提案された彼の任命は，まだティエールによって裁可されていなかった．彼は数時間後に ― 一時的に ― **任命される**にすぎない．彼はすでに (彼もまた)，きわめて抒情的な布告を『官報』に送っていた．そこで彼は「身命を賭して進む」ことができると主張する．)

(和訳書『下』, p.137)

ここでは，quelque heures plus tard という時間副詞との共起のうえ，さらに ne … que による時間副詞の焦点化がなされている．これは FH を用いる基盤となっており，時間副詞を焦点化することによって，いっそう局所性が一層強調されている．

さいごに，「話題的断絶」の例を見てみよう．

(60) Dès le 15 février, l'Assemblée s'attaque à la garde nationale. Les « trente sous » ne **seront payés** qu'aux sédentaires présentant une sorte de certificat d'indigence. Dès lors la garde ne **sera** plus le peuple en armes mais une foule d'indigents secourus par la charité publique. Puisqu'il est impossible de désarmer la garde (dont on sait qu'elle ne **se laissera** pas faire) ou de la livrer aux Prussiens (qui n'ont pu forcer les défenses de Paris), on va la discréditer, la dissocier, puis la dissoudre. (第 5 部 1 章, p.223)

(二月一五日以後，議会は国民衛兵を攻撃する．「三〇スー」は，ある種の貧窮証明書を提示する駐屯兵にしか**支払われなくなるだろう**．そのときから，衛兵はもはや武装した人民ではなくして，公共の慈善によって救済される貧乏人の**群れとなるだろう**．衛兵を武装解除し (彼らがされるが**ままにならない**ことはわかっている)，あるいは，それをプロイセン兵 (彼らはパリの防備を破ることができなかった) に引き渡すことは不可能なので，衛兵の信用を失わせ，分裂させ，ついで解散させようとするのだ．)

(和訳書『下』, pp.18-19)

この例は，迂言的未来形の隣接性と FH の跳躍という性質が明白な事例となっている．2 月 15 日以降を一連のまとまりとしてみると，「国民衛兵を攻撃する」という歴史的現在で表されている事行が基準となり，公民衛兵に対する攻撃の話だとわかる．

FH で示されている事行は攻撃の話から話題的に断絶し，攻撃した結果の後の展開へと跳躍して

いることが明らかである．つまり，前後の文脈から話題的断絶がなされている．

以上で見てきた諸特徴により，FH の用いられる箇所では何らかの断絶が見られ，そのことが FH の跳躍の機能と協調し合っていることがわかる．そしてこの跳躍が FH に先取り機能をもたらしているのである．

また，5.1.2.で触れたように，Confais (1995) によると FH は映画の flash back と同じ語りの技巧を持つとしているが，この先取りはむしろ flash forward とも言いうる未来の牽引効果であると考える．未来の概念に関しては，迂言的未来形とともに prospectif / rétrospectif の問題がしばしば取り上げられる[36]．未来の先取りのもととなる牽引効果は，Novakova (2001) が述べている「到来する未来」/「ゆき先としての未来」[37] の「到来」と同様の効果であろう．

以下でこの「到来する未来」の例を見てみよう．

(61) Au cours même de l'action désespérée de Gambetta, chef de la délégation de Tours, pour galvaniser la défense militaire et organiser des armées, des tendances séparatistes se font jour, prises en main par des ligues de départements et de régions ; ligues du Midi, du Sud-Ouest, de l'Ouest. Ces tendances donnent du souci à Gambetta, pris entre le désir de maintenir son autorité et le fait que les préfets et les fonctionnaires les plus efficacement patriotes sont des gens de gauche, des répuhlicains s'appuyant sur les « rouges » et par conséquent peu soumis au gouvernement central. Les tentatives lyonnaises, en fin septembre 1870, montrent bien le péril de la situation et ses contradictions internes. Toutefois, ces contradictions ne **pousseront** pas loin leur oeuvre en province. Les ligues, les mouvements séparatistes, les émeutes républicaines, comme en mars les tentatives communalistes, **seront** facilement **matés** par le pouvoir. Coupés de Paris et de son mouvement républiecain, démocratique et socialiste, nulle part les « rouges » de province ne **parviendront** à prendre en main les tendances décentralisatrices, à les orienter, à leur donner un double contenu, patriotique et social, en les organisant, en transformant en programme le projet. Quand la Commune leur **tendra** la main, ce **sera** trop tard, ou vainement. Si faible qu'il fut, le pouvoir Gambetta **aura** **rétabli** une autorité « légale » et centrale, à défaut de sa principale mission et raison d'être : la contre-offensive victorieuse contre l'ennemi du dehors. (第 4 部 1 章, pp.173-174)

(軍事防衛にテコ入れし軍隊を組織するための，トゥール派遣代表ガンベッタの必死の工作のさなかに，分離主義の傾向が現われ，南仏同盟，南西同盟，西部同盟など，県と地域の同盟によって支持される．これらの傾向はガンベッタに不安をあたえる．彼は，自分の権威を維持しようという熱望と，もっとも有力な愛国者である知事や役人は，左翼の人々であり，《赤》に依拠する共和派であり，したがって中央政府にはほとんど従わないという事実との板ばさみになる．一八七〇年九月末のリヨンの試みは，状況の危

[36] たとえば，Lansari (2009) は迂言的未来を半過去形におかれた rétrospection と称している．
[37] Novakova (2001, pp.144 sq.)

険さと内在する矛盾を充分に示すものである．しかしながら，これらの矛盾が地方においてその作用を深く**押しすすめることはないだろう**．同盟や，分離主義の運動や，共和派の暴動は，三月におけるコミューン派の試みと同じく，権力によってたやすく**屈服させられるだろう**．パリと，その民主主義的で社会主義的な共和主義の運動から切り離された地方の《赤》は，どこにおいても，地方分権的傾向を掌握することも，それを方向づけることも，またそれらを組織し，企てをプログラムに変えることで，愛国的かつ社会的という二重の内容をそれらにあたえることも**できないだろう**．コミューンがこれらの傾向に手を**さしのべる**のは，手おくれであるか，空しい**であろう**．いかに弱体とはいえ，ガンベッタの権力は《合法的》で集権的な権威を**再建することになるだろう**．もっともそれは，外敵に対する反攻の勝利という主要な使命と存在理由には欠けるけれども．) (和訳書『上』, pp.304-305)

ここでは，FH が連続して出現している．基準時との断絶機能を持つ FH の連続はそれだけで一種の世界を形成しており，FH で示される事行がつづいて読み手の眼前にもたらされることで臨場感が感じられる．これは映画における flash back と類似した機能であり，過去に起きた事行がまとまって提示されていく flash back に対して，flash forward は未来の先取りした出来事のまとまりが読み手の眼前に提示される (到来する) ことを示している．

FH を使用することによって未来の事実が先取りされ，この先取りした事実が起こる方向に向かって叙述が進行していくことを示すが，同時に，跳躍元の時点でいくつかの潜在的な選択肢があったことを暗黙に表していることにもなる．これを図説すれば以下に示す図 L のようになる．

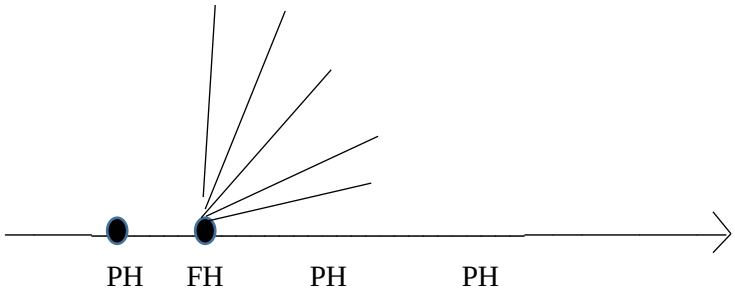


図 L

過去叙述というのは筆者によって選択された出来事について述べていることでもあり，過去には他の選択肢もあったという潜在性があることを認めなければならないだろう．そして，その複数の潜在的な選択肢はもちろん複数の未来の展望も含んでおり，その時点で出来事の可能性が様々な方向に開かれていたことを意味する．Ricoeur (1985) は，「われわれの未来に対する期待が過去の再解釈に及ぼす反作用は，その重大な結果として，過ぎ去ったものとみなされる過去に忘れられた可能性，流産した潜在性，抑圧された試みを開く(この点での歴史機能の一つは，未来がまだ決定されていず，過去そのものが期待の地平に向かって開かれた経験の空間であった過去の

諸時点につれもどしてくれることである．)」[38] (Ricoeur 和訳書, 1990, p.411) と指摘しており，歴史テクストでは FH がこのように期待された世界へ向かって展開していく方向性を示す働きをしているのではないかと考えられる.

以上の分析から，FH は歴史的現在がある歴史的出来事とともに定立することによってはじめてその歴史空間の提示が可能となるもので，つまり FH は歴史的現在に常に立脚しており，FH にとって歴史的現在との共起は必然的であることがわかった．また，FH は過去の様々な潜在的可能性，つまり開かれた過去を暗示するという機能を有し，FH の導入によって先取りされた出来事に向かって叙述が進行していくことも示すことが了解された．FH によって描写される出来事が読み手に叙述の方向性を提示し，その飛躍性ゆえに歴史の連続性と歴史の開在性を強く印象づける効果を持っている．それは死んでしまったものとしての過去の描写ではなく，過去の救済[39]を提示する描写であると述べ得るであろう.

5.2.2. 過去形と歴史的未来の共起

5.1.で分析したように, 歴史叙述は語りの方法としての Benveniste (1966) の二大区分に従えば, discours / histoire のうちの histoire に分類される.「histoire の言表行為は (…) 過去の出来事を物語るのが特性である」[40] とあるように，書き手にとっての現在よりも前に起こった出来事を述べるものである[41]．したがって，歴史叙述において一般的に用いられる動詞時制が過去形であることには正当性があり，Benveniste (1966) も以下のように述べている.「ー歴史の言表行為では，(三人称の形において) 無限定過去，半過去形，大過去形と予見時称がはいる．現在，完了，未来 (単純形と複合形) は除外される.」[42]

Benveniste は，無限定過去 aoriste は単純過去または定過去のことで，語り手の人称の外にある出来事の時称であるとし，また予見時称 prospectif は，allait + inf や devait + inf などの迂説的時称であるとしている．つまり，歴史的現在や FH が histoire に含むものとしては語っていない．しかしながら，第 4 章で観察したように歴史叙述において現在形や FS が用いられていることは明白であり，事実，本稿のコーパスである *La Proclamation de la Commune* が特殊なものなわけではない.

(62) Il s’en fait même, par l’imagination et la littérature, une idée tellement embellie que la réalité le

---

[38] (...), le choc en retour de nos attentes relatives à l’avenir sur la réinterprétation du passé peut avoir pour effet majeur d’ouvrir dans le passé réputé révolu des possibilités oubliées, des potentialités, avortées, des tentatives réprimées (une des fonctions de l’histoire à cet égard est de reconduire à ces momenrs du passé où l’avenir n’était pas encore décidé, où le passé était lui-même un espace d’expérience ouvert sur un horizon d’attente) ; (Ricoeur, 1985, p.329)

[39] Benjamin, W. (1989) : *Paris, capitale du XIXe siècle : le livre des passages*, Paris. を参照のこと.

[40] L’énonciation *historique*, (...), caractérise le récit des événements passés. (Benveniste, 1966, P.219)

[41] 歴史叙述において，対象となる出来事が書き手や読み手の現在や未来にも密接に関係して続いていることを述べることもあり，その場合，書き手の現在に立脚し，FS が用いられる場合がある．こうした FS は Benveniste の histoire の概念としての歴史叙述や本稿の分析対象とは異なるため，除外する.

[42] — dans l’énoncoation historique, sont admis (en formes de 3e personne) : l’aoriste, l’imparfait, le plus-que-parfait et le prospectif ; sont exclus : le present, le parfait, le futur (simple et composé) ; (…). (Benveniste, 1966, p.245)

décevra. (J. Bainville, *Napoléon*). (*Grand Larousse de la langue française*, p.2117)

(想像と文学性によって，現実は彼を失望させるものであるという，かくも美化された考えを彼は作りなした．)

(63) Les rumeurs fraient avec les manipulations. Celles-ci conduisent, dès juin 1990, sur la piste des « bacchanales » : on apprend que le cimetière sert régulièrement de rencontre nocturne à des jeunes gens de bonne famille. Quarante jeunes sont interpellé. Tous **seront** finalement **relâchés**.

(*Le Monde*, août 1996) (Barcelò et Bres, 2006, p.110)

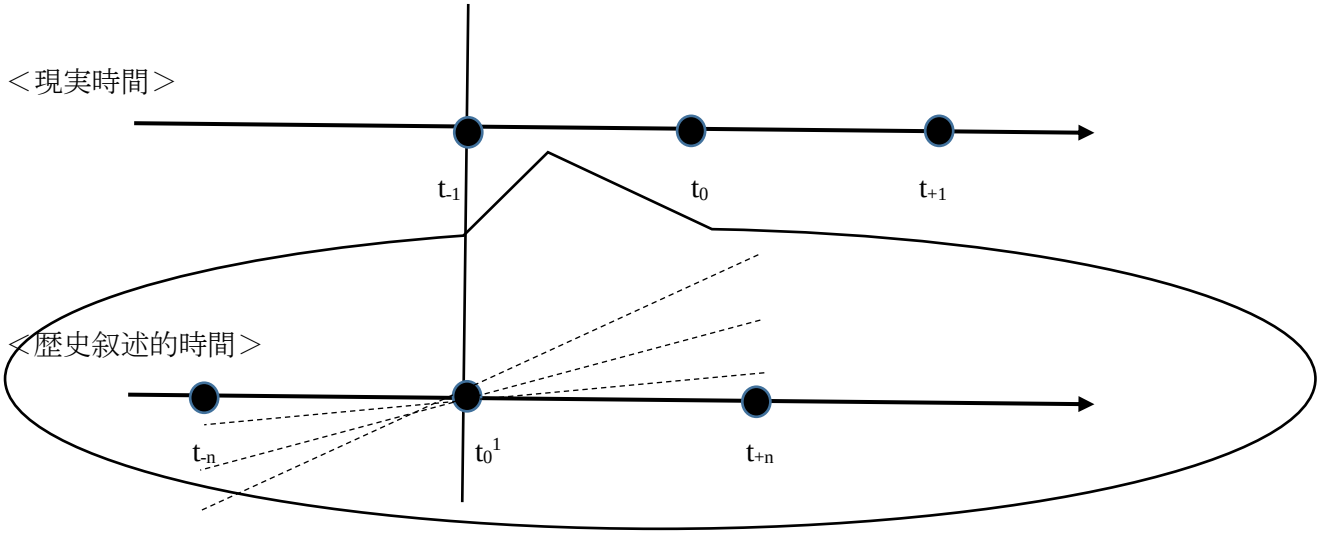
(噂は操作と親和性がある．操作は，1990 年 6 月から，ひとを「馬鹿騒ぎ」の場へと導いた．墓地は，両家の子女たちにとって，夜の出会いの場としていつも役立っていると知られている．40 人の若者が捕まった．全員が結局は解放されることとなる．)

(64) [...] quand le virtuose se rend en Russie, c'est sur recommandation de Balzac. Imprudence dont Balzac **se repentira**. (*Mercure de France*, janv. 1950, p.99.)

(cité par Touratier 1996, p.178)

(演奏家がロシアにおもむいたのは，バルザックの推薦によってであった．この軽率さを，バルザックは悔やむこととなる．)

それではなぜ，現在形や FS が使用されることがあるのか．また，なぜそれらの使用が可能となるのであろうか．この疑問を解くために，われわれはここで，5.1.3.で挙げた時間軸を使用したいと思う．われわれが実際に生活している日常的な時間軸である現実時間では，時間は常に未来に向けて進行し，われわれは現在時 t_0 に位置し，その時点から見て時間の進行方向が未来 t_{+1} であり，その逆方向が過去 t_{-1} である．一方歴史叙述の際に用いられる時間軸である歴史叙述的時間においても互いに対する位置関係は同じだが，こちらでは，歴史叙述の現段階を疑似的に発話時 t_0 に準ずる時点として扱うことを表す t_0^1 は現実時間の t_{-1} に位置する．(図 M)



(※各時間の間隔は決まっていない．また，歴史事実は新発見等によって変わるため点線で潜在性を表す．)

図 M

過去に対する歴史叙述は，実際に起こった出来事について述べるので，現実時間軸の過去の中に位置づけられるものと考えがちであるが，それでは過去の歴史叙述において現在形や単純未来形を用いることができる理由を説明できない．しかしながら，上記の 2 つの時間軸の導入によってその説明が可能となる．

歴史叙述的時間軸では各時制が現実世界と同じ性質を有し時間軸上で機能していると考える．現実時間において FS には発話時より後に事行を位置づけるという性質があるが (第 3 章参照)，これは発話時を基準時とみなすことによって有効となる性質である．したがって，5.2.1.で分析したように FH は歴史的現在に立脚することで使用可能となり，これは歴史テクストに用いられる複合過去形に対しても同様である．つまり，重要なことは発話時ではなく，基準時の存在である．複合過去形や単純未来形は discours に属すとみなされているため，多くの先行研究では単純未来形は発話時に立脚すると定義している．したがってテクストの語りが行われる発話時と描写している出来事の現在時とが異なる歴史記述において FS の使用は不可能であると思われるが，基準時という中心点を導入することで FS の使用が可能となる．このように歴史叙述では時間軸の現実時間から歴史叙述的時間への移行が見られる二重構造化現象が起こる．それゆえ，過去の歴史叙述における現在も未来も一般的には過去の出来事であり，現実時間と歴史叙述的時間での時間軸上でのズレが生じている．また，過去時制は現実時間においても過去であるが，語りの問題となっている過去性は基準時からの過去である．さらには，歴史叙述における時間の進行は現実時間軸の進行のように一方向に一直性に向かうものではなく，歴史的史料の発見などによって進行方向が変わるものであり，その広がりの可能性も様々なものである．したがって，図 M のようにその方向性は潜在的に無限になり，その点から見ても，FH を使用した歴史描写は過去形のみによる歴史描写とは異なり，決定論的なものではなく，語り手の主観的な予想や期待なども内包し

た開在的なものであると述べ得るだろう．

つぎに，FH が使用可能となる理由については分析したが，ではなぜ歴史叙述にわざわざ FH を用いるのかについて見ていこう．それには過去形の性質が関係してくる．まず過去形の定義を見てみると，Grevisse (1980) は単純過去形について以下のように述べている．

(65) Le passé simple (passé défini) exprime un fait complètement achevé à un moment déterminé du passé, sans considération du contact que ce fait, en lui-même ou par ses conséquences, peut avoir avec le présent. Il n'implique en soi ni l'idée de continuité ni celle de simultanéité par rapport à un fait passé et marque une « action-point ». (Grevisse, 1980, p.837)
(単純過去 (定過去) は過去の定まった時点に全く完遂された事実を示す．その際，その事実が，それ自体によって，あるいは結果によって，現在ともちうる接触を考慮することはない．単純過去は，それ自体では，ある過去の事実との連続性の観念も，同時性の観念も含意しない)

また，Benveniste (1966) は aoriste 単純過去または定過去を用いる歴史叙述の特徴に関して次のように述べている．

(66) A vrai dire, il n'y a même plus alors de narrateur. Les événements sont posés comme ils se sont produits à mesure qu'ils apparaissent à l'horizon de l'histoire. Personne ne parle ici ; les événements semblent se raconter eux-mêmes. (Benveniste, 1966, p.241)
(実は，このときはもはや語り手さえ存在していない．出来事はそれが歴史の領域に現れると同時に生じたものとして提示される．ここには誰も語るものはいない；出来事自身がみずから物語るかのようである．)

つぎに，Grevisse (1980) は複合過去形については以下のように定義づけている．

(67) Le passé composé (passé indéfini) indique un fait achevé à une époque déterminée ou indéterminée du passé et que l'on considère comme étant en contact avec le présent, soit que ce fait ait eu lieu dans une période de temps non encore entièrement écoulée ou que ses conséquences soient envisagées dans le présent. (Grevisse, 1980,p.839)
(複合過去 (不定過去) は，過去の定まった，あるいは定まっていない一時期において完遂された事実を示す．その過去の時期は，現在と接触しているものと考えられている．ある場合には，この事実は，まだ完全に過ぎ去っていない時期において起きたものであり，またある場合には，その事実の結果が現在において考えられる．)

一方，Mainguneau (1999) は FS の本質を以下のように主張している．

(68) Énoncer au futur, ce n'est pas situer un événement dans l'avenir, c'est désirer, ordonner, craindre, etc. Seule une vision réductrice du langage qui en fait un simple véhicle d'informations permet de rejeter dans les marges ce qui est en réalité l'essence même du futur : la tension modale.

(Mainguneau, 1999, p.101)

(未来形で述べることとは，未来にある出来事を位置づけることではなく，切望したり，命令したり，おそれたりすることである．言語活動をただの情報伝達とみなす還元的な見方だけが，モダールな志向という，実際には未来形のまさに本質であるものを周辺へ追いやってしまうのである．)

つまり，FS は本質的にモダリティを内包していることを意味し，現実時間である FS の歴史叙述的時間における役割をしている FH の使用には，必然的に主観相が付随するということである．

複合過去形は話者の体験として記憶にある，現在につながる事実を主観的に表すと朝倉 (2002) は述べている [43]．話者は歴史叙述では書き手となり，したがって複合過去形での叙述には書き手の主観相があることを意味する．現在に立脚した主観相を有する動詞時制ということで，歴史叙述的時間において同じ性質を持つ FH の対極に置かれるものと認められるだろう．一方朝倉は，単純過去形とは，現在と断絶し完全に過ぎ去った過去における瞬間的行為 (点行為) を客観的に表すものとしている. これは, 単純過去形による歴史叙述には主観相が全くないことを意味する. 単純過去形はもともと書き言葉のみに用いられ histoire の動詞時制の代表のような存在であり, 歴史叙述的時間に位置することに疑いはない．しかしながら，その類似性質により FH の対極に位置する複合過去形とは異なり，単純過去形はどちらかというとモダリティが付与されていないと言われる歴史的現在と似ているだろう．本稿では過去形に関しては詳しく分析しないためこれ以上の考察は行わない.

複合過去形・単純過去形どちらも FH との共起に疑問はないことを見たが，この 3 つの時制すべてが共起することも可能であることにも触れておく. なぜなら, 朝倉によると複合過去形は「孤立した過去の事実」を表すという性質も持っており,「継起する事件を単純過去で叙述し，一連の事件に関係のない事実を複合過去形で述べる」という共起した場合の役割り分担もあるからである.

過去形だけで叙述しない理由の一つとしては，各時制本来の存在意義から，時間の流れを明確に表現したいということが考えられるだろう．過去形や現在形など一つの時制による叙述では，現実時間軸上の過去を振り返った事実の列挙しか感じられない．しかしながら時間の概念である過去・現在・未来が揃うことで時間の流れが発生する．そして時間の流れは出来事に物語的展開を付与する．つまりさまざまな時制の共起によって，歴史叙述に生き生きとしたドラマチックな印象効果を与えるのである．ここにも歴史叙述的時間軸の導入の有効性が認められるだろう．そ

[43] 朝倉季雄 (2002), pp.373-377

してそこで FH は，ある出来事に関する一連の物語的叙述の最終地点を表す働きをしている．これは 5.2.1.で観察した，FH は開かれた過去を表すという機能とも関係している．複数の潜在的可能性が暗示され，その中の FH によって選択された一つの出来事の方向へ進むという未来の展望は，そこを最終地点とみなすことに妥当性があり，またある出来事に関する一連の物語的叙述の盛り上がりを表すとも言える．なぜなら，第 3 章で確認した FS のモダールな用法や (68) で Mainguneau が述べているように，FS には主観相が内包されているため，一連の流れの最終点をそこに定め FH を用いたということには書き手の主観が現れており，そこには何らかの感情が存在すると言えるからである．

Benveniste (1966) は過去叙述について，「この三つの用語，«物語»と«出来事»と«過去»とは，平等に強調される．これは，物語のなかに話し手が全く介入することなく，ある特定の時点に生じた事実を提示するものである．」[44] と指摘しているが，少なくとも過去形・現在形・未来形が出現する歴史叙述においては，書き手の介入が認められ，そこでは主観性が生じていると考える．そしてこのことは，従来の FS に関する研究においては FH が FS の用法の一つとして分類されているが, FH は FS の統辞論的一用法というレベルでのみ機能するものではないことを示すだろう．

以下，コーパスの実例に即して過去時制との共起の事例を検討してみよう．

はじめに，「半過去形」との共起から見ていくことにする．

(69) Or, selon. Louise Michel, le comité de Montmartre (toujours lui) et plusieurs bataillons ouvriers <u>exigeaient</u> cette offensive. Elle <u>était</u> à coup sûr possible. Les trois itinéraires sur Versailles (par Châtillon, par Sèvres, par la côte de Picardie) n'<u>étaient gardés</u> que par quelques contingents de gendarmes, endiguant le reflux de l'armée en retraite. Versailles ne **<u>disposera</u>** de troupes fraîches et en bon état moral qu' à partir du 2 avril. Pendant plusieurs jours, avec 20 bataillons, quelques canons et mitrailleuses, le Comité central <u>pouvait</u> prendre Versailles sans grandes difficultés. « *Il <u>fallait</u> immédiatement marcher sur Versailles* » (Marx).

(第 5 部 2 章, p.281-282)

(ところで，ルイーズ・ミシェルによれば，モンマルトルの委員会 (いつもこの委員会だが) と労働者大隊のいくつかは，この攻撃を要求した．攻撃は確実に可能であった．ヴェルサイユに向かう三つの道筋 (シャティヨン経由，セーヴル経由，ピカルディの丘経由) は，退却中の軍隊が引き返すのを食いとめるために割り当てられた数の憲兵が守っているだけだった．ヴェルサイユが，あら手の士気良好な部隊をもつのは，四月二日以後のことに**なるだろう**．中央委員会は，二〇大隊と数門の大砲，霰弾砲をもって，数日でさしたる困難もなくヴェルサイユを占領することができたのである.「すぐさまヴェルサイユに向かって進軍しなければならなかったのだ」(マルクス).)

[44] Ce trois termes, « récit », « événement », « passé », sont également à souligner. Il s'agit de la présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit. (Benveniste, 1966, p.239)

(和訳書『下』, p.132)

まず，à partir du 2 avril という日付によって局所性が示されている．さらに，半過去形が多く共起していることにより，過去の状況の描写が基調になってくるくだりであることがわかる．ここで，1 箇所だけ FH を用いることにより，局所的な先取りの効果がみられる．前節の (69) で見たのと同じように，ne … que によって時間副詞が焦点化されており，その効果の基盤になっていると言える．また，歴史的現在を介さず半過去形から FH へと続く文脈から，歴史的現在基調の文連鎖で使われるよりもより距離感がある，大きな飛躍性が感じられる．

つぎに，単純過去形との共起も見てみよう．

(70) Pendant les années suivantes, la lutte politique se déroule en grande partie autour de la Commune, de la réhabilitation des Communards et de l'amnistie. Les légalistes (Clemenceau), les républicains centralistes (Gambetta), les conciliateurs (la franc-maçonnerie), les centristes et opportunistes bénéficièrent de la conjoncture, c'est-à-dire du sacrifice des Communards, mais ce n'est qu'un aspect mineur de l'histoire. La république bourgeoise fut consolidée le 30 janvier 1875, puis en février 1876 par les élections générales. Cette république d'abord conservatrice, **recevra** lentement un certain contenu démocratique. (第 7 部 2 章, p.397)
(続く何年かのあいだ，政治闘争の大部分はコミューンをめぐり，コミューン　派の復権と特赦をめぐって展開する．合法主義者 (クレマンソー), 中央集権的共和主義者 (ガンベッタ), 和解派 (フリーメイソン), 中央派，日和見主義者などが，このような情勢から，すなわちコミューン派の犠牲から利益を得たが，しかしこれは歴史の小さな局面にすぎない．ブルジョア共和政は一八七五年一月三〇日，ついで一八七六年二月の総選挙によって強化された．この共和政は最初は保守的であったが徐々に一定の民主主義内容を**受け入れることになる**．　) (和訳書『下』, p.346)

継起的な単純過去形による描写は，歴史的現在による叙述と平行関係にあるため，テクスト的な機能は前節で見た歴史的現在の事例と類似している．(70) の例も前節で検討した段落の末尾に生起する FH であり，そのテクスト的効果は同様であると言えるだろう．

最後に，複合過去形との共起の例を見ておこう．

(71) Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement, véritable conseil de guerre, qui ne **se séparera** que vers 2 heures du matin, au moment où vont commencer les opérations, arrête le dispositif militaire. M. Thiers est arrivé depuis deux jours à Paris. A Paris, il n'a trouvé que 12 000 hommes armés (la division Faron) plus 3 000 gendarmes. Il a immédiatement obtenu de Bismarck l'autorisation de porter l'armée à 40 000 hommes. Il doit se présenter le 20 mars devant l'Assemblée nationale. Cette échéance approche. Thiers est pressé d'agir.

(第 5 部 2 章, p.236)

(この間に (零時) ，実際上の作戦会議である政府の一会議が軍隊の配置を決定する．この会議は作戦がいよいよ開始される瞬間，午前二時ごろにやっと解散されるだろう．ティエール氏は二日前からパリに来ていた．パリで彼が見つけたのは，武装した一万二〇〇〇人の兵士 (ファロン師団) と三〇〇〇人の憲兵だけであった．彼はただちにビスマルクから，軍隊を四万人に引き上げる許可を獲得した．彼は三月二〇日に，国民議会の前に姿を現わさなければならない．この期限は近づいている．ティエールは行動を急ぐ．)

(和訳書『下』, p.46)

複合過去形は，文脈上歴史的現在とも共起している．歴史的現在が視点をおく $t_0{}^1$ における結果状態を複合過去が示しており，視点が共通しているため，歴史的現在と協調し合って FH を用いる基盤を提供していると言える．(71) では，歴史的現在で示されている「軍隊の配置を決定する arrête le dispositif militaire」に視点としての基準時が定位され，その時点よりも「2 日前 depuis deux jours」にティエール氏が来ていたという結果状態を複合過去形で表している．そして同じ基準時よりも後の事行を FH によって示しており，共通の基準時を通して複合過去形との共起が成り立っている．ここでの FH は vers 2 heures という時間の提示によって局所性が示されると同時に「軍隊の配置を決定する」という基準時とは断絶しているため，それに付随する飛躍性が見られる．

以上より，過去形との共起が可能な仕組みや，現在形と同様，過去形との共起においても飛躍性やテクスト的効果が見られることが明らかになった．

5.2.3. 迂言的未来形と歴史的未来の共起

歴史叙述において未来が表される際に，FH だけではなく迂言的未来形も用いられることがある．第 2 章の統計表から分かるように，全 410 ページである本稿のコーパス *La Proclamation de la Commune* において，FH が 272 例に対して迂言的未来形が 125 例と，迂言的未来形の使用を少なからず確認でき，第 4 章で FH との共起を観察・分析し，歴史叙述においても 2 つの未来形の間には未来を表す際の明確な性質的区別があるため使い分けられていることが了解されたが，ここではさらに詳しくこの問題について考えてみたい．

迂言的未来形と FS の違いの一つとして，渡邊 (2014) は発話時点からの連続性と断絶を挙げている．歴史叙述では語り手がテクストを語る発話時点と記述されている過去の出来事の時点の一致はないが，歴史的現在によって定位された時点からの連続性と断絶として，歴史叙述においてもこうした性質が有効となっていると考えられる．

第 4 章で観察したように，本稿のコーパスにおいても迂言的未来形は，歴史的現在で定位される直前の文からの時間的連続性を強調したい時に用いられている．時間軸に沿った歴史的現在や単純過去形だけでの叙述では表すことができなかった出来事間の緊密性と切迫性が，迂言的未来形 (図 N では FP とする) を用いることによって感じられるようになる．

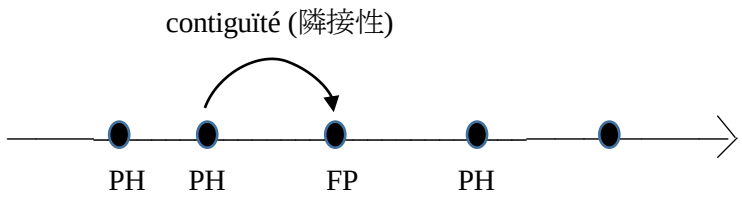


図 N

この効果は，跳躍のような断絶を持たないため，潜在的選択肢を暗示せず，決定された一方向へ進むというつながり，すなわち隣接性を重視する迂言的未来形の性質が大きく関係している．

一方 FH は，5.2.1 で分析したように直前の文で定位された現在時から跳躍し，事実の先取りを行う．そしてその先取りした出来事の発生が近いかどうかという時間的な距離の問題は考慮されない．だがこの跳躍こそが，FH が開かれた未来を示す機能を持つことと関係していると考える．なぜなら，跳躍の際に定位された現在時と断絶するため，複数の潜在的可能性の暗示が可能となるからである．

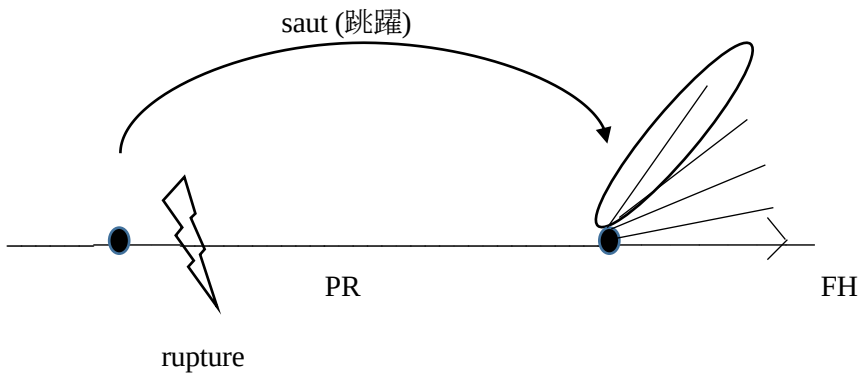


図 O

これら図 N と図 O を参照し，もう一度第 4 章で観察した例を見てみよう．

(72) Pendant ce même temps (heure zéro), un conseil de gouvernement, véritable conseil de guerre, qui **ne se séparera que** vers 2 heures du matin, au moment où **vont commencer** les opérations, arrête le dispositif militaire. M. Thiers est arrivé depuis deux jours à Paris. A Paris, il n'a trouvé que 12 000 hommes armés (la division Faron) plus 3 000 gendarmes. Il a immédiatement obtenu de Bismarck l'autorisation de porter l'armée à 40 000 hommes. Il doit se présenter le 20 mars devant l'Assemblée nationale. Cette échéance approche. Thiers est pressé d'agir. (5 部 2 章, p.236)
(この間に (零時)，実際上の作戦会議である政府の一会議が軍隊の配置を決定する．この会議は作戦がいよいよ開始される瞬間，午前二時ごろにやっと解散されるだろう．ティエール氏は二日前からパリに来ていた．パリで彼が見つけたのは，武装した一万二〇〇〇人の兵士 (ファロン師団) と三〇〇〇人の憲兵だけであった．彼はただちにビスマルク

から，軍隊を四万人に引き上げる許可を獲得した．彼は三月二〇日に，国民議会の前に姿を現わさなければならない．この期限は近づいている．ティエールは行動を急ぐ．)

(和訳書『下』, p.46)

この例は興味深く，FH と迂言的未来形双方とも，午前 2 時という同じ時に関して述べている．しかしながら異なる二つの時制によって述べられていることによって，われわれはそれぞれの未来の出来事を異なる印象で捉えることとなる．

まず，直前の事行で歴史的現在によって定位されている「軍隊の配置を決定する」という作戦と迂言的未来形で表されている「いよいよ開始される」との間には緊密なつながりがあり，われわれは切迫している状況だという印象を受ける．また，他の潜在的選択肢は全く感じられない．一方，FH で表されている，会議は「解散されるだろう」には，会議が「軍隊を配置を決定する」という現在との緊密なつながりは感じられず，飛躍した先の出来事を先取りしている印象を受けるだろう．その上，解散されるという出来事以外にも，解散されないかもしれない (また，別のことが起こるかもしれない) という潜在的可能性が感じられる．

もう一つ類似した例を見ておこう．

(73) Dès le 15 février, l'Assemblée s'attaque à la garde nationale. Les « trente sous » ne **seront payés** qu'aux sédentaires présentant une sorte de certificat d'indigence. Dès lors la garde ne **sera** plus le peuple en armes mais une foule d'indigents secourus par la charité publique. Puisqu'il est impossible de désarmer la garde (dont on sait qu'elle ne **se laissera** pas faire) ou de la livrer aux Prussiens (qui n'ont pu forcer les défenses de Paris), on va la discréditer, la dissocier, puis la dissoudre. (第 5 部 1 章, p.223)

(二月一五日以後，議会は国民衛兵を攻撃する．「三〇スー」は，ある種の貧窮証明書を提示する駐屯兵にしか**支払われなくなるだろう**．そのときから，衛兵はもはや武装した人民ではなくして，公共の慈善によって救済される貧乏人の**群れとなるだろう**．衛兵を武装解除し (彼らがされるが**ままにならない**ことはわかっている)，あるいは，それをプロイセン兵 (彼らはパリの防備を破ることができなかった) に引き渡すことは不可能なので，衛兵の信用を失わせ，分裂させ，ついで解散させようとするのだ．)

(和訳書『下』, pp.18-19)

この例は，迂言的未来形の隣接性と FH の跳躍という性質が明白な事例となっている．ここでは, 5.2.1.節でも観察したように, FH で示される事行は前文脈からの話題的断絶がなされており，基準時となる「攻撃する」の結果の結果の展開へと跳躍している．それに対して,「衛兵の信用を失わせ，・・・する」という迂言的未来形によって表されている事行は,「攻撃する」の方向性を示しており，歴史的現在で定位されているその時点と流れがつながっている，つまり隣接していることが明らかである．

また，丸括弧内の FH も 5.2.1.節での分析同様，丸括弧の補足説明という性質にともない基準時から断絶し，さらに on sait que 以下の補足節のなかにあることで視点が当時の人びとと融合し，後の展開の潜在性が感じられる．

これらの事例は，トピックの焦点の変化で表すとわかりやすいだろう．以下は，渡邊 (2014) を参考に 5.2.3.の概念を取り入れ改変したものに，さらに筆者が焦点を導入した迂言的未来形 (図 P) と FS (図 Q) の図である．図 P と図 Q で t_0^1 は，歴史叙述の現段階を疑似的に発話時 t_0 に準ずる時点として表したものである．図 P では，迂言的未来形の構成要素となる移動動詞 aller の意味としてある漸進性を反映し，可能世界を持たない直線的な時間への位置づけである．そして aller によって連続性が保証されている．それに対して，図 Q においては，動詞事行を P とし，FS によって位置づけられる P は, 他の可能世界 (m) にくらべて相対的に蓋然性が高いとみなされる期待世界 (m*) を構成している. 点線は対立する事行 P / non-P だけではなく潜在的可能性もあることを表している[45]．t_0^1 と t_{+1} の間には断絶がある．

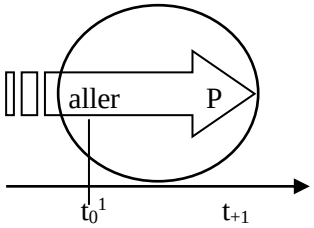


図 P

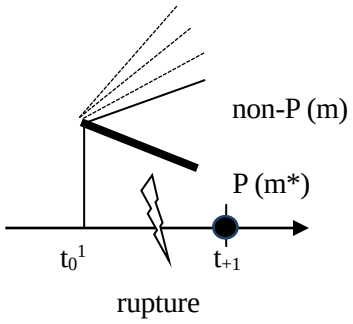


図 Q

迂言的未来形では定位された現在とのつながりが重要であり時間的連続性を見るため丸で示される焦点の範囲が広い．しかしながら，FH では現在とのつながりではなく，FH で表される先取りした出来事 (潜在的選択肢も含む) に焦点をフォーカスする．

このように，定位された現在との時間的なつながりを示し，未来の潜在的可能性を暗示しない迂言的未来形と, 定位された現在と断絶し時間的跳躍を行い, 未来の潜在的可能性を暗示する FH とでは，歴史叙述においても働きが大きく異なっている．

6. 結論

本稿では，*La Proclamation de la Commune* という歴史テクストをコーパスとして，歴史叙述におけるフランス語の動詞時制 FS，つまりは FH の機能に関する考察を行った．先行研究が語っているように, 歴史の叙述の際に用いられる FS の一用法を FH と言うというだけでは，なぜ過去についての叙述のなかで未来をあらわす FS を用いることができるのか，FH がどのような構造や働きをもって使用されているのかが不明瞭であった. さらに, 従来の用法研究では短文抜粋のため,

[45] 4.2.3. の潜在的世界 U に入るものである．物語と違い，歴史は新しい史料の発見等によって事実が変わる可能性を有しているため，点線で表されている．

テクスト全体における FH の働きを理解することが困難であった．したがって，FH が多数出現する一つのテクストを使用し，実例を参照しながらその機能を第 4 章及び第 5 章で検討してきた．その結果，大まかに言って，次の 4 つの点が解明できた．

(1) 意味論的視点から，客観相の語りを中心とする histoire によって構成される歴史テクストに主観相の語りを中心とする discours の時制である FS を導入することが有効であることが観察されたが，それは語りのレベルの移行と時制の移行という 2 段階の移行であり，それはまさに飛躍的展開と言えるものである．この飛躍によりもたらされる立脚点からの断絶と自立性は，FH の機能のもととなる重要な特徴であった．この飛躍をもたらす FH は歴史叙述において用いられた場合に，FH で示された事行が位置する時点において，その事行以外にも他の事行も可能であることを潜在的に孕んでいるということを暗示する機能が見出された．これは，過去の開在性の表象機能とも言えるものであり，歴史は閉じられたものではなく様々な可能性を持った開かれたものであり，過去の決定論的断定から過去の広がりを救済する機能をもつと述べ得るものであった．

(2) 語用論的側面から，FH の飛躍は flash forward とも呼びうる時間軸上での先取り機能をもたらし，それはこの先取りした事実が起こる方向に向かって叙述が進行していくという叙述の方向性の提示を行っていることが確認された．また，現実時間と歴史叙述的時間という 2 つの時間軸の導入によって，テクストを著者が語る発話時と歴史的出来事の現在時が異なるという歴史叙述において，FS の使用が可能となる仕組みを明らかにでき，さらに，他の動詞時制との共起が可能となることもまた説明できた．

(3) 統辞形態的視点から，基準となるテクスト内の現在との時間的連続性 (つながり contiguïté) の強さという機能をもつ歴史叙述の中に登場する迂言的未来形に対して，断絶・時間的跳躍 (saut) 機能を持つ歴史テクスト内での FH との使い分けは，以下のような差異を有することが理解できた. 迂言的未来形は時間的な側面での未来相の様子という特性を持つのに対して，FH はモダールな側面をも含んだ，つまりは，語り手の期待や願望などといった主観相が色濃く反映していると述べ得る．

(4) 文体論的視点からは，単純過去形や歴史的現在だけを使用した叙述も可能である歴史テクストだが，FH を用いて物語的展開を行うことができ，生き生きとしたドラマチックな文体論的効果を示すことができることが明らかになった．つまりは，単純過去形を基盤とした叙述や，歴史的現在のみの叙述においては，記述される出来事が単調で変化の少ない描写となる可能性が高いのに対し，FH の導入は歴史的出来事を表現する場合に，その描写にアクセントをつける働きをしているのである．

すなわち，FS は歴史叙述という特定のテクストのジャンルにおいて，独自の機能を有するということが了解されたのである．以上，本研究により，FS の一用法として分類されるにとどまっていた FH を理論的に解釈するために有効な方法を提示でき，言語学的視点に加え人間科学的視点

も取り入れた考察を通して，FH の使用が可能となる構造と FH 独自の機能を明確化できたと思われる．

この論文を結ぶにあたって，FH に対する今後の探究課題について述べたいと思う．その課題は以下の 4 点である．

(1) 本稿では，選択したコーパス内でじゅうぶんに FH の出現が多いためにそのコーパスのみを使用して分析を行った結果，FH の意味的・文体的機能に関する問題解決の方向性は提示できたが，より詳細に検証するためには複数の同じジャンルに属するコーパスを使用し比較分析する必要があると考える．また，同一テクスト内でも FH の出現率が章ごとに異なる理由をより厳密に分析していく必要があるだろうと思われる．

(2) FH に関するさらなる探究を行うには，同じ histoire という語りに分類される物語 / 歴史小説 / 歴史書を区別して考えなければならないだろう．なぜなら，客観的に事実を述べる歴史書と，実際の事実に基づきながらもフィクション要素が入る歴史小説と，完全にフィクションである物語では，大きな差異があるからである．また，histoire におけるディスクールの動きといった視点での探究も必要となるだろう．この問題を解明するために，histoire という語りのテクストにおいて discours に属する動詞時制の出現が可能となる仕組みを明らかにしなければならないだろう．

(3) スタイルとしての歴史描写に関する検討を行わなければならない．テクストジャンルとどのような関係性があるかを示していくために，例えば Bakhtine が主張している対話理論[46] を分析装置としてさらなる検討を行う必要性があるだろう．

(4) 歴史テクストに登場する単純過去形・複合過去形・歴史的現在・迂言的未来形・条件法など他の動詞時制との比較の深化を行わなければならない．テクストを構成する動詞は多様であり，いかなる動詞を語り手が選択するかという問題は，単純な問題ではない．テクスト空間内での言説的展開と動詞的な多様性との問題をよりいっそう検討しなければならないだろう．

参考文献

青木三郎 (1998) :「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 34, pp.115-133.

朝倉季雄 (著)・木下光一 (校閲) (2002) : 『新フランス文法事典』白水社.

朝倉季雄 (監修)・冨永明夫・鈴木康司 (著) (1972) : 『スタンダードフランス語講座 (7) 』 大修館書店

ミハイル・バフチン(著)・新谷敬三郎ほか(訳) (1988) :『ことば対話テキスト』新時代社

Bakhtine, M. (1984) : Esthétique de la creation verbale, Paris, Gallimard.

Barceló, G. J. et J. Bres. (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Paris, Ophrys.

Benjamin, W. (1989) : *Paris, capitale du XIXe siècle : le livre des passages*, Paris, Editions du cerf.

Benveniste, E. (1966) : *Problèmes de linguistique générale Ⅰ*, Paris, Gallimard.

Benveniste, E. (1974) : *Problèmes de linguistique générale Ⅱ*, Paris, Gallimard.

エミール・バンヴェニスト (著)・阿部宏 (監訳)・前島和也ほか (訳) (2013) : 『言葉と主体ー一般言語学の

[46] Mikhaïl Bakhtine (1984) : *Esthétique de la creation verbale*, Paris, Gallimard.
ミハイル・バフチン(著)・新谷敬三郎ほか(訳) (1988) :『ことば対話テキスト』新時代社

諸問題－』岩波書店.
Confais, J-P. (1995) : *Temps, mode, aspect : les approches des morphèmes verbaux et leurs problèmes à l'exemple du français et de l'allemand*, Toulouse, Presses universitaires du Mirail.
Culioli, A. (1990) : Pour une linguistique de l'énonciation, tome 1, Paris, Ophrys.
Culioli, A. (1999a) : Pour une linguistique de l'énonciation, tome 2, Paris, Ophrys.
Culioli, A. (1999b) : Pour une linguistique de l'énonciation, tome 3, Paris, Ophrys.
Grevisse, M. (1975) : *Le Bon Usage*, Louvain-la-Neuve, Duculot.
髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (2010) :『フランス語学概論』駿河台出版社.
髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 (編著), 安西記世子・小倉博行・酒井智宏 (著) (2011) :『フランス語学小事典』駿河台出版社.
Imbs, P. (1960)：*L'emplois des temps verbaux en français moderne*, Paris, Klincksieck.
川口順二 (2006) : 「モダリティ動詞 aller」『藝文研究 (慶應義塾大学) 91, 3, pp.1-19.
川口順二 (2007) : 「未来表現をめぐって」『藝文研究』(慶應義塾大学) 92, pp.93-109.
Koselleck, R. (1979) : *Vergangene Zukunft. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten*, Frankfurt, Suhrkamp.
Koselleck, R. (1990) : *Le futur passé : contribution à la sémantique des temps historiques*, Paris, Éditions de l'École des hautes études en sciences sociales.
Lansari, L. (2009) : *Les périphrases verbales aller + infinitif et be going to*, Ophrys.
Leeman-Bouix, D. (1994)：*Grammaire du verbe français*, Paris, Nathan.
Lefebvre, H. (1965) : *La Proclamation de la Commune, 26 mars 1871*, Paris, Gallimard.
ルフェーヴル, H. (著)・河野健二ほか(訳) (2011) :『パリ・コミューン』(上) (下), 岩波書店.
Maingueneau, D. (1999)： *L'Enonciation en linguistique française*, Paris, Hachette.
Martin, R. (1971)：*Temps et aspect*, Paris, Klincksieck.
Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Paris, Presses Universitaires de France.
南舘英孝 (1998) :「Aller + inf. と単純未来」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, pp.22-33.
練尾毅 (1998) :「近接未来形について」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, pp.34-44.
西村淳子 (2004) :「テクストの時制分布と連関の形－テクスト言語学の方法－」『武蔵大学人文学会雑誌』(武蔵大学) 36,1, pp.37-73.
Novakova, I. (2001) : *Sémantique du futur*, Paris, L'Harmattan.
小川紋奈 (2013) :「単純未来形についての一考察」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』28, pp.63-90.
Ricoeur, P. (1985) : *Temps et récit tome Ⅲ*, Paris, Seuil.
ポール・リクール (著)・久米博 (訳) (1990) : 『時間と物語Ⅲ 物語られる時間』新曜社.
Rocci, A. (2000)：« L'interprétation épistémique du futur en italien et en français », *Cahiers de linguistique française*, 22, pp.241-274.
Touratier, Chr. (1996)：*Le système verbal français*, Paris, Colin.
Wagner,R.L.et Pinchon,J. (1962) :*Grammaire du français classique et moderne*, Paris, Hachette.
ヴァルター・ベンヤミン (著)・今村仁司ほか (訳) (2003) : 『パサージュ論』第 3 巻, 岩波書店.
Walter Von Wartburg et Paul Zumthor (1958) : *Précis de syntaxe du français contemporain*, Berne, A. Francke.
渡邊淳也 (2003) :「Devoir の機能について－認識的用法を中心に－」『玉川大学文学部論叢』(玉川大学) 43, pp.105-139.
渡邊淳也 (2009) :「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の綜合化・文法化について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 55, pp.123-144.
渡邊淳也 (2013) :「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 63, pp.69-106.
渡邊淳也 (2014) : 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.
Weinrich, H. (1973) : *Le temps : le récit et le commentaire*, Paris, Seuil.
Wilmet, M. (2007) : *Grammaire critique du français*, 4e éd, Bruxelles, De Boeck.
山口昌男 (2000) :『文化と両義性』岩波書店.

（おがわ　あやな / 文芸言語専攻 4 年）